翻訳

王家に生まれて

リチャード・ハフ 作
茅原道昭 訳

はじめに

『王家に生まれて』*Born Royal* の作者リチャード・ハフ（Richard Hough：一九二二年生まれ、一九九九年没）は海洋史を専門とするイギリスの作家・歴史家である。一九七二年にはデイリーメール最優秀海洋文学賞を受賞している。勉学を終えたのち、第二次世界大戦当初に英国空軍に入隊し、ハリウッドから遠からぬ飛行場に駐屯していた。一九五二年に処女作『見知らぬ失われた世界へ』*Into a Strange Lost World* を出版。その後イギリス海軍・王室に関する作品を多数著わしている。また児童文学書に対してはブルース・カーター（Bruce Carter）というペンネームで執筆活動をしている。代表作には映画「バウンティー号の反乱」の原作となった『ブライ船長とクリスチャン』*Captain Bligh & Mr. Christian*、また『戦艦ポチョムキンの反乱』*The Potemkin Mutiny* などがある。

この『王家に生まれて』（一九八八年出版）は英国ウィンザー家のジョージ五世とメアリー王妃の子どもたちの成長を詳しく描いた物語である。彼らは上から、デヴィッド（後のエドワード八世、その後ウィンザー公）、バーティー（後のジョージ六世）、メアリー（ハーウッド卿と結婚）、ハリー（後のグロスター公）、ジョージ（後のケント公）、ジョン（若くして死去）の六人で、デヴィッドの幼少期から物語は始まって、ウォリス・シンプソンとの結婚による彼の退位、そしてバーティーの即位で終わっている。

国王夫妻と子供たちの関係、そして上の二人の兄弟の成長を軸にこの物語は描かれているが、またこの当時の外国の王室で、ウィンザー家の親戚に当たる人々との関係も詳しく描かれていて大変興味深い。

なお、原著にある脚注は各章の最後に付した。

『王家に生れて』：
ウィンザー家の若者たちの人生と愛
（一八九四年―一九三七年）

序　文

マウントバッテン家の歴史を調査し、マウントバッテン卿の伝記を書く上で、初代ウィンザー家となる、ジョージ五世とメアリー王妃の六人の子供たちの隠れた存在を無視することができなくなった。マウントバッテン卿は、一番下の早世した男の子を除くこれらすべての従兄たちをよく知っていて、彼らについてしばしば語り、私に彼らの人生と人格についての貴重な知識を与えてくれた。

マウントバッテン卿は、未来の国王であり、ウィンザー公となるデヴィッド（エドワードの愛称）を「私のもっとも親しい友人」であると常に口にして、バーティー（ジョージの愛称）と共に過ごした、ケンブリッジ大学時代をはさむその頃の思い出を懐かしんだ。彼らの関係は、エドワード八世（デヴィッド）の退位とヨーク公（バーティー）がジョージ六世として王位についた後、一層重要で緊密なものとなる。

このようなかなり以前の資料を調査しながら私は、その幼年時代、青年時代を通じてウィンザー家の者たちと面識があったり、また共に勉学したり遊んだりした他の知人を知るようになった。このことから私はさらに子供部屋、勉強部屋、海軍と陸軍の兵学校における彼らの成長、彼らと両親、祖父母との関係（そこには大変な違いがあるのだが）、そして子守女、家庭教師、侍従武官との関わりを調べてみた。

私の著書である『ルイスとヴィクトリア』におけるフィリップ公への言及について彼自身が述べたところによると、「私には特別なところは何もない。特別なのは私の立場だということだけである」ということだ。これを信ずるべきかどうかは別にして、この子供たちの人生を支配していたのはその特別な立場なのであった。それは、多大な日々の責任、雑用、義務から彼らを解放し、その代わりにより一層の責任と特権を彼らに与えたのである。そしてそのすべてが彼らを選りすぐりの人種にして、国民の尊敬と注目を集めさせることになる。

彼らの私生活については、その当時は今日よりも公になることがずっと少なかったので、我々が彼らについて現在知り得ること

がそれだけ魅力あるものになっている。

この書は、世紀の変わり目に生まれ、大きな社会的変化と矛盾の中で成長する宿命を負い、その地位にかかわらず自らそれに適応していかねばならなかったこれらの若き王子たちと一人の王女にとって、揺り篭から華燭の典に至る人生がどのようなものであったのかを示そうとするものである。これらの「可哀相な、年若い、特権を持った王子たち」のある者は他の王子よりも上手に対応し、生彩に富んでいる。しかし私には彼らのそれぞれが非常に魅力にあふれていると思われる。

劇作家や台本作者がそうするように、本書に載せてある打ち解けた様子の写真を説明する時、私が限られた範囲で会話をふんだんに使用していることがすぐに明らかになるであろう。脇役となる人物たち、侍従武官、子守女、家庭教師などはすべて実在の人々である。しかし彼らの主人や奥様が彼らに望んだように影の薄いものとするよりもむしろ、彼らが間違いなくそう望んで、おそらくそうしたように、事件や人物について記録を残したり、意見を述べたりする機会を彼らに与えることにした。

ということでこれは、後に『ヴィクトリア女王』となった、ローレンス・ハウスマンの戯曲『幸福と栄光』の形式と精神を持った「劇的な伝記」、もしくは伝記集なのである。哀れなハウスマンは一九三五年まで彼の全作品の上演許可が認められなかったが、ついにチェンバレン卿はいくつかの作品の公的な上演を許可することで開化的な一面を示した。規制がずっと緩和したこの時代では、多大な苦渋を舐め、財産を犠牲にしたハウスマンのような運命を恐れる必要はない（と願いたいところだ）。この著作は戯曲の体裁であるというよりもむしろ物語として書かれているのだが、彼自身の弁護の言葉を繰り返しておこう。つまり本書は「悪趣味からでもなく、中傷でもなく、冒涜でもなく、治安を乱すようなことはない」のである。

リチャード・ハフ

主な登場人物

（登場順）

ヨーク公ジョージ：後に皇太子、そしてジョージ五世。エドワード七世の次男。次出のメイと結婚。

ヨーク公爵夫人メイ（メアリー）：後に皇太子妃、そしてメアリー王妃。

デヴィッド（エドワード）：ジョージとメイの長兄、後に皇太子、エドワード八世、そしてウィンザー公。

バーティー（アルバート）：ジョージとメイの次男、後にヨーク公、そしてジョージ六世。

ラーラ・ビル夫人：ジョージとメイの子供たちの養育係。

フレデリック・フィンチ：ジョージとメイの息子たちの召使い、後にデヴィッドの執事となる。

メアリー：ジョージとメイの一人娘、後に王女、そしてハーウッド伯爵夫人。
ヴィクトリア女王：次出の母。
バーティー（アルバート、既出の彼の孫と混同しないように）：皇太子、後にエドワード七世。
ハリー（ヘンリー）：ジョージとメイの三男、後にグロスター公。
アリックス（アレグザンドラ）：皇太子妃、後にアレグザンドラ王妃。エドワード七世皇后。
ルイス・オブ・バッテンバーグ公提督：後に初代ミルフォード・ヘイブン侯爵。次出の父。
ルイス・オブ・バッテンバーグ公ディッキー：後にルイス・マウントバッテン卿。次出の息子。
ルイス・オブ・バッテンバーグ公女ヴィクトリア：後にミルフォード・ヘイブン侯爵夫人。ヴィクトリア女王の孫娘。
ヘンリー（ミダー）・ハンスル：ジョージとメイの子供たちの家庭教師。
ジョージ（リトル・ジョージ）：ジョージとメイの四男、後にケント公。
ジョン：ジョージとメイの五男。
アンドリュー・オブ・グリース公：フィリップ公の父で次出の夫。
アリス：ルイスとヴィクトリアの長女、アンドリュー・オブ・グリース公女。
ロシア皇帝ニコラス二世：次出の夫。
アリッキー（アリックス）：ルイスとヴィクトリアの下の娘、ロシア皇后。ディッキー・バッテンバーグの許婚であるマリー大公妃の母。
ルイス・グレッグ：侍従武官、後にバーティーの王室監査官となる。
バクルー公：次出の父。
レディー・アリス・スコット：グロスター公ヘンリーの奥方。
ストラスモー伯爵夫人セシリア：次出の母。
エリザベス・ボウズ＝ライアン：ヨーク公バーティーの奥方で次出の姉。
デヴィッド・ボウズ＝ライアン。
ウォリス・ウォーフィールド：後にスペンサー夫人、次にシンプソン夫人、そしてウィンザー公爵夫人。デヴィッドの奥方。
アーネスト・カッセル卿：次出の祖父。
エドウィナ・アシュリー：後にディッキー・マウントバッテンの奥方。
ギリシャ王女マリーナ：ケント公ジョージの奥方。
ラセルス子爵ヘンリー（ハリー）：後に六代目ハーウッド伯爵。ジョージとメイの一人娘メアリーの夫。
ジェイミー：初代フィンドホーン子爵ジェイムズ・スチュアート。エリザベス・ボウズ＝ライアンの友人。

第一章　幼年時代

我が魂よ、辛抱強い客となって席につき、
芝居が終わるまでその評価を下してくれるな。
筋書きには数多の変化がある。毎日
新しい場面が展開する。最後の幕が芝居を決めるのだ。
フランシス・クォールズ

1

夕方になって幼い息子が部屋に来ることはかなりの重荷であり、公爵夫妻はそのことを恐れるようになった。ヨーク公ジョージはタイムズを読み、公爵夫人はこれから起こることに対して気持ちを落ち着けようとしていた。彼女は時計をちらりと見ていたが、そんな時、時計が五回鐘を鳴らした。「ご心配なさらないで下さい、奥様」と女官のメアリー・ライゴン夫人が言う。「今夜はうまくまいりますよ」「そうだとも、そうだとも」新聞の後ろから公爵がきっぱりと言った。それから妻に向かって、「彼は疲れ切っているにちがいないよ、メイ」と言い放った。

公爵夫人は結婚する前はメイ・オブ・テック公女といった。彼女は刺繍道具を取りあげて、それにとりかかり始めた。しかし心はうわの空だった。三年前の美しい六月の日に結婚した時は、子供を妊娠し、出産するという一連の務めがそれほど辛く、不快なこととは思ってもみなかった。また最近まだ幼いうちに子供たちと接触することはずいぶん嬉しくないことであると分かり、どのようにして彼らを遠ざけようか考えるようになった。

彼女の親戚の家庭では、子供たちが、身体や身なりをきれいにして子供部屋から降りて来る時間は、お話しやゲームがあり、乳母が彼らをベッドまで連れて行く前のおやすみのキスまで楽しい日課であった。それなのにどうして彼女の最初の子供は、両親のそばにいることをそんなに嫌がるようなのであろうかと、メイ・ヨークは再び自問してみた。部屋の中の何かが少年をびっくりさせ、ジョージと彼女には関係がないことなのであろうか。彼女は居間を見回した。時計の振り子が揺れているせいだろうか。彼女自身が選んだ薄いグレーの縞模様の壁紙のある美しい部屋だ。ドアのそばには、両手を天に差し出した子供が描かれた大きな宗教画が掛かっている。そして彼女のそばの象眼細工のテーブルにはたくさんの重々しい縁取りの付いた写真があった。そのほとんどは、おばあ様のヴィクトリア女王陛下が君臨している家族とジョージの親戚のものである。模様の入った素材の傘と房飾りのある、どっしりと彫刻された背の高い台の付いたランプのせいではないであろう。これもまた彼女が選んだものだ。椅子の後ろの衝立てであるはずはないだろう。誰かを恐がらせる代物ではない。それは花の模様があり、部屋の中にもまた至るところに夏の花が生けてあった。彼女は花を愛していた。ほんの子供の頃からずっ

とそうであった。花を恐がる子供がいるであろうか。

夏の夕方のまだ早いうちの太陽がヨーク家の屋敷の窓から差し込んで、すべてのものを美しく見せていた。しかし遠くの方だが、必ずこちらにやって来ると思われる子供の泣き声が広間を抜けて近づいて来た。メイはその襲撃に対して覚悟をした。ドアのすぐそばで突き刺すような叫び声がして、乳母の叩くノックの音をほとんど消し去った。

自分を落ち着けようとするその声で、メイは「お入りなさい」と叫んだ。公爵は不本意ながら新聞を置いた。彼は、不幸なトルコ人と同じように不幸なギリシャ人との間のクレタ島での危機に関する、長い一面の記事を読んでいたのだった。

グリーン夫人が二才になる彼女の預かっている幼児を腕に抱いて入って来た。彼女は三十代後半の、背の高い、骨張った女性で、グレーの髪を後ろにきっちりとひっつめに結っていて、突き出た頬骨と大きな、はっきりとした鼻を持ち、可愛い、金髪の男の子に宥めるように話しかける時、ひどく虫歯があるのがわかった。しかしデヴィッドは最良の状態ではなかった。実際彼はどうしようもない様子で、頬は涙で汚れ、口は大きく開いたままだった。自分自身の苦痛にまったく気を奪われていて、目は断続的に開かれるだけであり、それから糊で固くなったような乳母の胸に、そこが慰めを見いだせる唯一の場所であるかのごとく頭をうずめた。

「公爵夫人様、申し訳ありません。下に降りて来られるとどうしてこうなってしまうのか分からないのでございます」とグリーン夫人が言う。

苦悩しながら、メイは椅子から立ち上がり、両手を差し伸べて、息子に向かって歩き出した。しかしこのことは子供の声を一層張り上げさせるだけであり、彼女はじっと立ったまま、涙をその目から溢れさせていた。「私の可愛い子・・・」

「彼を連れて行きなさい、グリーン夫人」海軍士官が後甲板で叫ぶきっぱりした声で公爵が命じた。「息子はヒステリックになっている」

グリーン夫人は、顔に取り乱した表情を浮かべ、子供をしっかりと抱いて退出した。が、一度部屋から出ると彼女の表情は変わった。幼子をつねるのを止め、彼の濡れた頬を自分の頬によせて、呟いた。「可愛いお坊ちゃま、今夜はこれで終わりましたよ」そして彼の細い金髪を撫でて、レースのハンカチで涙を拭ってやり、何度もキスをした。「可愛いデヴィッド様、可愛いデヴィッド様！」

階段の最初の踊り場で彼女が大切にしている子供が発したのは、低い、呻くような啜り泣きだけであった。そう、今夜はこれで終わったのだ。後は笑顔ともっとたくさんのキス、そして深い眠りに落ちる前に宥めるような声を聞くだけであろう。

後のウェールズ公、そしてエドワード八世、そしてまたウィンザー公であるデヴィッド王子は、生涯グリーン夫人の腕に抱かれて味わった毎晩の苦役を忘れはしなかった。「ひどいものだった」と彼は思い出す。「しかしどうして彼女はあんなことをしたのだろうか。うがった推論をすると、私に対する彼女の力が父や母よりも勝っていることを示したかったのであろう」

ところがそれだけではなかったのである。公爵家の内部の一人が後になって、ヨーク家の屋敷で夜ごと行なわれたこの苦役の本当の理由を説明した。「グリーン夫人は精神的に不安定な女性でした。自分自身で子供を生むことができず、旦那さんとも別れてしまいました。でも結婚する前に養育係としての完全な訓練を受けていて、ニューキャッスルの公爵様のお屋敷に雇われたのです。奥方様は、夫人がもはや必要でなくなった時にきちんとした推薦状をお渡ししましたが、若く、結婚されたばかりで、ご経験の浅いヨーク公爵夫人はそれで承知したのでございました」

グリーン夫人は挫折した母としての感情をすべて幼いデヴィッドに向けた。彼は愛するに足る幼子であった。「お坊ちゃまは抱きしめたくなるほど可愛かったのです」若い見習い育児婦の、「ラーラ」とも呼ばれていたビル夫人は断言した。「本当に可愛いお子様でした。眠っていらっしゃらない時はベッドで喉を鳴らしていらっしゃいました」それから意味深長に「私はお坊ちゃまに触らせて頂けませんでしたが」と付け加えた。

屋敷の中の誰かがこのことに気づくまで何ヶ月も過ぎ去った。つまりグリーン夫人が、息子の愛情を得ようとする公爵夫人を恐れて、彼の精神的な苦痛を母親と結び付けることにより彼を母親に反発させるように固く決意していたことである。最初の疑惑が浮かび上がった時、階下の使用人たちは、この半分狂ったような女性が暴れ出すのではないかと恐れて口をつぐんでいた。ついに事実が表面に現われたのは、デヴィッドの弟のバーティーについてのグリーン夫人の取り扱いからであった。

バーティー、つまりアルバート・フレデリック・アーサー・ジョージ王子はヨーク邸の公爵夫人の寝室で、一八九五年十二月十四日に生まれた。この日付は赤ん坊の生涯の不吉な始まりを示しているようである。というのはこの日はヴィクトリア女王の愛した、高貴な夫君アルバート公の命日に当たり、女王は喪に服すことになっていたからである。アルバート公の早すぎる死からすでに三十四年過ぎ去ったという事実と、彼らの結婚生活の明らかに不均衡な関係は、女王が年毎に悲しみに没頭することを弱めたりなどしなかった。「おばあ様は、この楽しい出来事が暗く、悲しい命日に起こったことにひどく困っておいでだった」と女王の長男が自分の息子のジョージ・ヨークに宛てて書いている。そして続けて、その赤ん坊に、女王を慰めるためアルバート（バーティー）と名付けたらどうか、またおばあ様に名付け親になってもらうように尋ねてみたらどうかと示唆している。

こういった心配はすべて無用であった。というのは年老いた女王の日記にこう記されているからである。

ジョージからの電報を見つける。愛しいメイが今朝の三時に無事男子を出産したと書かれてある。ジョージは当初、この愛しい子がこのような悲しい日に生まれたことを残念がっていたようだ。私は、それがこの可愛い子にとっての祝福であり、神からの恵みとみなすべきであると感じた。

バーティーはセイント・メアリー教会で滞りなく洗礼を受けた。サンドリンガムにいる時はいつも王室はそこで礼拝をするのである。グリーン夫人の独占的な腕の中から十八ヶ月のデヴィッドは洗礼式の時間までミサを静かに見つめていた。が、その時になって赤ん坊は苦痛のわめき声を立て始めた。兄も一層大きな声で唱和し、グリーン夫人はこれ幸いと彼を二月の肌寒い戸外に連れ出した。そこで彼はすぐに優しい言葉や愛撫で宥められたのであった。

しかしこの第二子が生まれる前から、グリーン夫人は、彼女の愛するデヴィッドから引き離されるかもしれないという猜疑心から腹を立て、赤ん坊に反発を感じていた。そのような危険はまったくなかったのであるが。そのために彼女は彼に対し無視と直截な残酷さで応酬した。例えば、バーティーは乳母車で午前と午後の散歩に出掛けた時いつもミルクを与えられていたのだが、乳母車はスプリングが付いていず、サンドリンガムの小道はでこぼこしていて、ミルクはほとんど飲めなかった。後になって彼が離乳食に飛び付こうとすると、食器はオートミールがほとんど手も付けられず、台所に下げられてしまうのである。「道理でお坊ちゃまがひどく青い顔をして虚弱だったわけだ」ラーラは日記に記している。「昨日公爵夫人が彼の青白いことと発育の遅いことを気になさっていたようだけれど」

メイは、一日の決まった時間を二番目の子供と過ごす間、彼とより良い関係になろうと期待していた。デヴィッドがいつも彼女のいるところで泣いたことに傷ついて、この新しい、あまり可愛くない幼子に対して、愛そうとする気持ちを持てないでいることに彼女自身気がついた。恐らく彼女には母親としての喜びを持つことができないような性格上の欠陥があるのだろうと自分自身に言いきかせた。他の母親たちは遠慮なく子供たちにキスをし、腕に抱いて、優しく声をかけているのに、彼女はどうしたというのだろう。

しかし避けられず、うんざりすることには、メイ・ヨークは身篭もり続け、バーティーが生まれた六ヵ月後再び妊娠していることに気がついた。

その間残酷にもバーティーは放っておかれ、グリーン夫人の振る舞いはますますおかしくなっていった。例えば・・・

（一八九七年二月十四日付けのラーラの日記から）どうしてよいかほとほとこまっている。今日グリーン夫人が私の手からアルバート王子様のご昼食の入った食器を取り上げた。「一日の分はもう十分召し上がったのです」と言っていたが、まったくそんなことはないのだ。可哀相なお坊ちゃまは衰弱してしまうだろう。

ついにこの不運な見習い育児婦は、女中頭からおかしな点を追求されるにつれ、心を打ち明け、つぎつぎと残酷な出来事を説明していった。その晩女中頭がメアリー・ライゴン夫人に彼女の部屋で二人きりで話しができるかどうか尋ねた。翌日公爵夫人からメアリー・ライゴン夫人への指示で、グリーン夫人は荷物をまとめて次の日にヨーク邸とサンドリンガムの土地から出て行くよう言い渡された。彼女は一ポンド金貨五つとロンドンまでの二等列車の切符を与えられたが、一切の説明はなかった。

（ラーラの日記から）私の生涯で最も恐ろしい夜だった。屋敷の薄い壁のせいで隣の部屋のすべての物音が聞こえた。グリーン夫人は一晩中泣いたり、呻いたりしていた。そして私はバーティー様のお命を案じた。なぜならグリーン夫人の半分狂ったような心の中ではすべての責任が王子様のやわらかな頭に負わされているのは明らかだからである。私は一度も目をつぶることがなかった。

しかし翌日疲れ切っているにもかかわらず彼女は先頭に立ち、王室の子供部屋の改革を始め、平等な、愛情ある、常に変わらないお世話をするという方針を決めたのだった。同時にフレデリック・フィンチが子供部屋付きの従僕として公爵家の一員に任命された。彼は以前ジョージに仕えていたが、デヴィッドが言うには、「臨機応変な男で、年若い我々と同じように断固とした信念を持っていた」彼の父は初代ウェリントン公爵に仕えている。デヴィッドが後にこう書いた。「彼が私たちの食事をもって来たり、お風呂のお湯を運んだり、他のすべての辛い仕事を行なった。彼はその時およそ三十才ほどであり、美男子で、逞しく、また男らしく、無論慇懃であったが、卑屈なところは微塵もなかった」

2

ヨーク邸でデヴィッドとアルバートの王子は妹や弟たちと一緒に育てられるのであるが、それは、ヴィクトリア女王の長男である彼らの祖父が社交的欲求を満足させるために、数年前サンドリンガム・ハウスの別邸として建てたものであった。ジョージが結婚して、住むところが必要になり、またヨーク公となったので、彼の父親がこの屋敷を与えたのである。

ジョージ・ヨークの伝記作者はこう記している。「それは、昔

も現在もそうであるが、ひっそりした、小さな別邸で、月桂樹と石南花の茂みに囲まれている。建物の材料となっているその土地の産である茶色の石が壁の荒塗りによって隠されているが、それがまたチューダー王朝風の梁によって活かされている」ハロルド・ニコルソン（伝記作者）は公爵の居間について、「北側の窓は鬱蒼とした潅木でふさがれており、壁を薄暗くさせている赤い布地によって一層陰鬱になった」と書いている。彼は、不幸なデヴィッド王子が毎晩連れて行かれた、公爵夫人の部屋の方がどれだけ明るく、また趣味が良いかを指摘してはいない。だがメイ・ヨークは、「知的な関心をあまり持たず、芸術上の趣味にも疎い」王室に新鮮で、上品な趣味をもち込んだのである。

メイは零落したドイツの公爵の娘で、芸術に対し、控えめだが、真の関心を持つ、美しい、活発な女性であった。彼女の名前が、ヴィクトリア女王の一番年上の孫であるエディー王子（アルバート・ヴィクター）の妃候補として挙がった時、ヴィクトリア女王は賛成しかねるようであった。「メイ・テックはだめでしょう」このドイツ娘の名前が結婚相手として、また将来の王妃の役割を果たす強力な候補として頭角を現した時、彼女は一番下の孫娘に宛ててそう書いた。しかしついにヴィクトリア女王は折れて、彼女を女王の広大で、恐ろしいスコットランドの城、バルモラルに招待したが、すぐに彼女の魅力と美しい容貌に満足したのだった。ヴィクトリア女王は、自分自身の目で確かめた上は、人物についての自分の意見を変えることに躊躇しなかった。それは、ライチョウの狩猟場で銃が射ち鳴らされている一八九一年の八月のことである。エディー王子はメイに魅了せれ、舞踏会で結婚を申し込み、その場で承諾されたのだった。宮廷での出来事、特に恋愛問題と結婚について常に深く関心を持っている国民は喜び、王室は安堵の深いため息をもらした。

この婚約に続く劇的な出来事は国民と大英帝国にとって祝福となった。エディー王子はほとんど生まれた時から心配の種となっていた。健康は決して良いと言う訳ではなく、精神面での成長も十分ではなく、自己の抑制がほとんどなかった。欲望だけが思うままにされていたが、一般大衆は、あの一層道徳的な時代に、今日国家的なスキャンダルになっているようなことについて何も知らなかった。彼の家庭教師はこの王子に対してできることはしていたのだが、王子は海軍で経歴を積むためにそちらにやられ、彼の弟が一緒についていった。ジョージはエディーの唯一の真の友達であり、兄に対するその忍耐強さは両親を驚かせ、また喜ばせもした。一八八〇年九月、二人の王子は海軍船で世界周航に参加した。政府は仰天し、王位継承者の無事を慮った。このことは、それが素晴らしい考えだと思っていた女王を激怒させたのであるが。この間に王子たちはオーストラリア沖で嵐に会い、もう少しで遭難するようなこともあった。二年に及ぶ航海がエディー王子の健康と成長にもたらしたものはすぐに消え失せてしまい、ふた

たび問題が起こり始め、ロンドンのソーホーにある同姓愛者がたむろする安宿でのスキャンダルで爆発した。王室はこの一件と他の見苦しい出来事を一般大衆に知られないようにするため、公的な場には現れなかった。彼の父の「最大の願い」は長男エディーが「できるだけ長い間素直で、純粋で、子供のよう」であり続けることであったが、そのようにはならなかった。実際エディーが二十代半ばで梅毒に罹ったことを信ずるに足る十分な理由がある。女王と彼の両親は、彼が結婚しようとしないのでやきもきしていた。

メイ公女がエディーの人生に突然飛び込んで来たのは、彼が二十七才の時であった。五週間後、国民がすでに王室の結婚というロマンスときらびやかさを期待していた時、エディー王子は流感に罹った。生来の虚弱な体質と放蕩で、肺炎に悪化し、一八九二年一月十四日それが原因で亡くなった。ヴィクトリア女王はこれについて、「国家と同様我々に降りかかった恐ろしい災難。悲しみと悔やみの気持ちは大きく、すべての国民で分かち合った。これほど悲痛で、悲劇的なことがかつてあっただろうか」と記している。

それから童話の中の予期せぬハッピー・エンドのように、美しい公女は悲しみに打ち勝って、あっと言う間に、ずっと聡明で、責任感があり、品のある弟のジョージと婚約してしまった。確かにヴィクトリア女王と王族の全員からの圧力が加わったとしてもおかしくはないであろう。だが有り難いことにそれはなかった。そしてイギリス国民と大英帝国全体がまもなく王室の結婚を祝ったのである。

デヴィッドは一八九四年六月二十三日ジョージとメイ・ヨーク夫妻の間に生まれた。ヨーロッパの列強が進んでアフリカ分割に乗り出し、日本が中国との戦争を決意した頃であった。出産は、メイの両親の屋敷である、リッチモンド・パークにあるホワイト・ロッジで行なわれ、洗礼名はエドワード・アルバート・クリスチァン・ジョージ・アンドリュー・パトリック・デヴィッドといい、後ろから四つの名はそれぞれイギリス、スコットランド、アイルランド、ウェールズの守護聖人にちなんでいる。彼は生涯デヴィッドで通した。

メイの三番目の子供は一八九七年四月二十五日に生まれ、女の赤ちゃんであった。ヴィクトリア女王は「私の可愛い即位六十年式典（Diamond Jubilee）の赤ん坊」と呼ぶのが気に入っていた。彼女の祖父は実際「ダイヤモンド」と名前をつけたかったのだけれども、そうすると赤ん坊が一生生まれた年を名前に刻んでしまうのではないかと指摘されたので、それは諦めた。彼女はついにサンドリンガムの教区教会でヴィクトリア・アレグザンドラ・アリス・メアリーと洗礼名を授けられた。母親のメイ（メアリーの愛称）と区別されるように常にメアリーと呼ばれている。

（メアリーの伝記から）青い目と、金色の巻き毛、それにバラ色の頬をしていて、これ以上に可愛い赤ん坊を探すことは難しいことであった。「イギリスの美しいバラ」とポワンカレ夫人は初めて彼女を見た時、思わず知らず叫んでしまった。そして極幼い時分から、その言葉が常にこの王女を最も的確に表現するものであると改めて興味深く思われる。

幸いにもメアリー王女はグリーン夫人のいなくなった後に生まれた。三番目の子供が乳母の狂った精神にどのように作用したであろうかというのは考えるに忍びない。実際のところヨーク邸の子供部屋は充足が支配していた。六才のデヴィッドは天使のような子供だった。バーティーは、かなり「やつれて」いて、兄よりも華奢であったが、幸せだった。幼児期の驚くような食事不足と事実上の飢餓状態で、彼はずっと体が弱いまま、生涯消化不良に苦しむことになる。

三年に満たない期間に次々と生まれたこの三人の子供たちは、結束の固いグループになった。というのもメイ・ヨークはやっと、短くはあったのだが、とても必要になっていた出産からの解放が認められたからである。デヴィッドは長男として、自然にゲームや他の遊びのリーダーとなり、バーティーに崇拝されたが、小さい頃お転婆娘だったメアリーは彼よりずっと独立心が旺盛だった。彼らはラーラを愛し、彼女は三人を慈しみ、気遣った。デヴィッドは後に、いかに彼女がしっかりと愛してくれたか、そしてフィンチが、必要な時には鬼軍曹のようであったかを語った。彼は子供らにあまり罰を与える必要はなかったが、一度そうすると子供たちは長い間忘れはしなかった。

メアリーがまだ赤ん坊の頃、ラーラが彼女を寝かしつけようとしている時に、一度デヴィッドは夜の子供部屋で戦争ごっこをしようと言い張った。彼女はだめだと言ったが、彼は聞き分けのない状態で、だだをこね続けていた。ついにラーラはフィンチの部屋に行って、こう告げた。「この子がどうしようもないの。あなたが鞭でぶってくれなければ、私がやるわ」フィンチはすぐに行動を開始し、床を蹴ったり、大声を出している彼を引きずって寝室まで連れて行き、お尻をいやというほど打った。

デヴィッドはこう記憶している。「私は苦痛からというよりもむしろプライドが傷ついたために大声を出した。そしてフィンチが、不本意だけれどもやむを得ない義務を全うした男といった様子で部屋を出て行こうとする時、私は彼の遠ざかる背中に、仕返しをしてやろうと叫んだ。『ちょっと待て。お前のしたことをパパに言いつけてやる』」

それとはうらはらに、この負かされて、怒り狂った少年が母親の寝室に呼び出された。メイはこの出来事について聞いていたので、普段は彼女のところにやって来ようとしない彼を慰めるどころか、十分に叱りつけ、そのように迷惑をかけたことを謝るよう

に言いつけた。

メアリーは家族の中ではいつもゴルディロックス（金髪美人）と呼ばれていた。彼女は可愛らしく、最初の三人の子供の中で最もお行儀の良い子になった。この模範とすべき資質は出産の時からであり、それは母親にあまり負担をかけることがなく、すぐに終わったのであった。「なんて可愛いお子さんでしょう」ラーラは、以前は男の子を包むのに使われていた、美しい刺繍のあるショールにくるまった彼女を初めて見た時そう呟いた。ほとんどの乳母は同じようなことを言ったが、ラーラはこの賛嘆を予言に拡大した。「彼女は公爵夫人の髪と美しい肌を持つでしょう。美しいものは永遠の喜びです。皆そのように申しております、奥様」

そしてラーラは、ほとんどのことでそうであったように、このことでも正しいことがわかった。メアリー王女は「桃のように育ち」、三才の時には、子供たちについては感情を示さず、好意的な意見を持たなかった彼女の父でさえ彼女に関しては誉めたり、慈愛に満ちたことを言うのが聞かれた。彼女の髪は母親と同じしっかりした黄褐色の巻き毛で、ブルー・グレーの目は、色が少し薄いのだけれども（そこから彼女の渾名がついたのだが）、兄のデヴィッドのように離れていて、微笑みは暖かく、人を信頼するものであった。

3

一九〇〇年六月の中頃、三人の子供たちは「海とすがすがしい、健康的な天候を求めて」、女王とともに滞在するためワイト島にあるオズボーン・ハウスにやって来た。デヴィッドはオズボーンについて後にこのように記している。「カウズの近くにある、イタリアのヴィラを模倣したまったく英国風でない屋敷である。子供ながらその屋敷の不恰好さに驚いてしまったが、それは『家族用共同墓地』と呼ばれていた。廊下や通路の床はモザイクが埋め込まれ、壁にはたくさんの奥まったスペースがあり、ガンガン（ヴィクトリア女王の愛称）の家族ですでに亡くなった者、またまだ生きている者の、白い大理石で出来た等身大の彫像がそれぞれ飾ってあった」

八月八日ヴィクトリア女王と一緒に芝生の上で撮った子供たちの写真がある。彼女はいつもの黒い服装で、イチハツのように開いた、黒い駝鳥の羽が刺してあるつばひろの帽子を被っている。その膝にはメイの一番下の息子、四ヶ月のハリーが乗っている。デヴィッドは曾祖母のそばでカメラを厳しく睨みながら立っているが、バーティーの方は不安そうだ。メアリーは二人の間にいて、友達を待っているかのように遠くを見つめている。彼女は三才三ヵ月であり、枝編み細工の椅子に腰掛けているが、デヴィッドの方は長ズボンをはいて立っている。弟はクッションに座り、膝小僧を突き出しているが、この膝が、彼の胃腸とほとんど同じく

らいに心配の種となることが後にわかるであろう。

五才、四才、三才の子供たちみんなが同じセーラー服の上下を着ている。メアリーは、水兵帽に見えるよう、丁寧に仕立てられてある丸い帽子を被っている。石のような心でも持っていなければ、この可愛い三人組みに情を動かされないということはあり得ないだろう。彼らは新しい世紀の始まりにおいて人生を開始したばかりであり、この世紀は特に男の子には多くの不幸をもたらすであろう。

老女王は即位六十四年目となり、膝の上の赤ん坊をほとんど視力が衰えた目で見ていたのだが、あと五ヵ月しか生きることはなかった。レンズのゆっくりした露出が決定し、黒いスーツの紳士が黒い布地の下から現れると、写真に撮られた場面から一転して三人の子供たちは急に活気を取り戻し、老夫人はこれといって動くこともなく、赤ん坊はまったく変わりがなかった。彼はラーラによって、丁重な挨拶の後に女王の膝の上から優しく抱きかかえられた。「みんな、遊びに行ってらっしゃい」と、デヴィッド、バーティー、メアリーは、女王から、まだはっきりはしているが、その目のようにかすれがちな声でそう言い渡され、すぐに遠く行ってしまったが、彼らのはしゃぐ声はオズボーンの庭に響き渡った。このワイト島では海が一番素晴らしく、フィンチの監督の下で小石を投げたり、その後、昼食前にだが、暖かい海でボート遊びをして、叫び声を挙げたり、海の水しぶきがかかったりですこぶる健康的に過ごすことだろう。

写真を撮ったその日の昼食で、三人の子供たちが薄く切ったマトンと、人参、バター入りマッシュ・ポテトのつけ合わせを食べている間、ラーラが言った。「お母様とお父様が午後におじい様[1]と一緒にロンドンからいらっしゃいます。フィンチがカウズの桟橋まであなたたちを連れて行き、ご挨拶をなさるように船にお乗せします。おばあ様が一諸に行って下さいますよ」

これはうれしいニュースだった。それは、母と父に会えるというよりもむしろ、外出して、父が「一般の人々」と呼んでいる者たちを見ることができるからである。彼らはいつも集まって、声援を送ったり、英国国旗を振ったりしている。またメアリーは男の子と同様に熱心だったのだが、機関士の一人にヨットのエンジン・ルームに連れていってもらうことができた。そこではわくわくさせるような、熱いオイルの臭いが強く漂っていて、光る真鍮の機械、運動するピストン、そして回転するシャフトを見ることができたのだ。

「どうしてオズボーンにやって来るの、ラーラ?」とデヴィッドは聞いた。「パパはすぐにライチョウ射ちに忙しくなるのに」

「女王様とお話しをなさりにいらっしゃるのです、そしてあなたたちとも」

「何について?　何を話したいの?」

ラーラは椅子から立ち上がって、プディングをもって来るよう

にベルを鳴らした。「私には分からないことなの、メアリー。話しがあるまではあなたたちにも分からないわ。バーティー、急いで。あなたはまた私たちを引き止めているのね」バーティーのお皿にはまだ半分食事が残っていた。食べることはこの少年にとってあまり嬉しくないことであり、彼はラーラが焦れているのには慣れていた。

カウズに出掛ける前にお話しの時間があった。ラーラは大きな杉の木の下で本を読んだ。遠くの方に海があり、東に向かって進む大きな定期船、そのチョークの線のように白い跡、堂々と、優雅にイギリス海峡に向かい、間違いなく大陸か、またはバルチック海の港に入るであろう、帆装の完備した一艘の三本マストの帆船が見えた。

ラーラは「イラストレイティッド・ロンドン・ニュース」にあるE・ネスビットの『将来の模範少年たち』を読んでいた。「より良い子供になることを学ぶために田舎に行かされた時、それはずいぶん良いことだと僕たちは感じた」木陰にいてもかなり暑く、バーティーとメアリーは眠気を誘う昆虫やカモメの鳴声とラーラの声にうとうとした。「モート・ハウスが僕たちの滞在した場所であった」しかしデヴィッドは緋色のタオルの上に横になり、目を大きく開けて、その言葉を音楽のように楽しんでいた。想像力をめぐらし、その話しの中の子供たちが冒険をしてどうなっていくのか推測して、すでにそれらを自分自身の生活に結びつけていた。

フィンチは三時ぴったりに現れた。彼とラーラが頻繁に顔を会わせ、また彼らの仕事が多くの点で重なり合っていることを考えると、彼らの関係はうまく行っていたのであろう。なぜなら彼らはお互いに笑い合って、一人ではつい深刻に考えてしまうような出来事も何気ないものにすることができたからである。ラーラは、彼が屋敷を出た後の砂利道を歩くブーツの音を聞いた。そして彼が到着する前に本を読むのを止めた。彼女は枝編み細工の椅子から顔を上げて彼に微笑んだ。彼は御主人様と奥方様の前に出る時の服装で、彼自身はそれを「満艦飾」と呼んでいた。ブーツは背後にあるキラキラする海のように光り、サージのスーツは上着とチョッキのボタンを掛け、折り目のついたズボンと同じく体にぴったりとまっすぐになっていた。きれいに剃ってある口髭は、御主人と同様に白髪が交じり始めていた。この打ち解けた間柄では、手入れの良い、茶色の山高帽を手に持っている。

「出かける時間だよ、ビル夫人」最初の頃であれば以下のように付け加えたであろう。「子供たちが清潔で服装もきちんとしているか気をつけなくては」しかしずっと以前に彼は、彼女が仕事において落ち度のないことがわかった。「五分後にランドー馬車（幌が前後に開き、座席が向かい合っている四輪馬車）をこちらにまわしてもらおう」

「すぐに支度をします、フィンチさん」彼らは共に、薄れてはい

るが、まだはっきりと残っている北方のアクセントを持っていて、それが彼らの会話に統一と、同時に堅実的な雰囲気を与えていた。

幌が開いたランドー馬車が、屋根のある、オズボーン・ハウスの正面玄関の前に横付けされ、年配の御者であるジェイムズと従僕のエジャートンが暗緑色の制服を着て、正しい位置に立ち、みんなが乗り込むのを待っていた。フィンチは三人の子供たちを馬車のそばに一列に並ばせて、彼らの祖母が来るのを待った。彼女は（いつものように）遅れて、笑いながらお出ましになった。

アレグザンドラ皇太子妃、通称「アリックス」は五十五才で、彼女が「ジョージのペット」と呼んでいる、次男の子供たちに深く愛されていた。その子供たちは今可愛いセーラー服の上下を着て、陽の光りの中で一列に並んでいる。

彼女が白の、長いドレスに大きな白い帽子を身につけ、女官に伴われてオズボーン・ハウスの正面玄関から現れると、二人の少年は頭を下げ、メアリーは深々とお辞儀をした。「可愛いジョージのペット」と彼女は彼らに挨拶した。「なんて可愛いんでしょう」と言って、彼らを順番に抱きしめた。「一緒にすてきなお出かけをしましょう。むこうでゲームができるわね。わくわくするようなデッキ輪投げはどうかしら？　みんな好きでしょう？」

アリックスはそのままお喋りを続けたであろう。しかしフィンチがいつもの背後の位置から慎重に進み出て、王室のヨットは時間通りに出発するのだが、それに遅れてしまうだろうと女官に告げた。エジャートンに助けられ、アリックスは馬車の踏み台に乗り、進行方向に向かう座席に腰を降ろし、二人の少年に彼女の両側に座るよう座席を軽くたたいた。一方トレッドゴールド夫人とメアリーは向かい側に腰を降ろした。

出かける準備をしている間も、また馬が番小屋まで馬車を引っ張って行き、そこで管理人とその妻が出て来て頭を下げ、挨拶をし、その後彼らがイースト・カウズの公道に出て、町に着くまでの間ずっと、一度たりとも祖母と子供たちのお喋りは止まなかった。アリックスは、一つ一つの言葉が彼女がかつて聞いた中で、最も大切なものであるかのように聞き入った。

町の人々はイースト・カウズに入る道の脇に出ていて、何人かは旗を持ち、通り過ぎる馬車に歓声を挙げた。皇太子妃が、子供たちと同様に町の人たちからも愛されていたというだけでなく、一九〇〇年には南アフリカにおける戦争が、以前の敗北の後から有利になっていたため、当時は愛国主義がたいへん強かったのである。「女王陛下の兵士たち・・・」アリックスは日傘の下から微笑み、子供たちは、かなり以前にこうした場合そうするように教えられていたので、小さく手を振った。

「ほらあそこに船が。なんてきれいなんだろう」デヴィッドはオズボーン号が見えて来るとそう叫んだ。それは停泊地からかなり離れたところに碇を降ろしていて、優雅な船首から船尾までの白い船体に青い線が入った、本当に美しいヨットであった。それ

には一本高い、傾斜した煙突があり、そこから黒い煙りが立ち昇り、南西の微風に優しく流されていた。スピットヘッドを航海する上でこの完璧な午後を楽しんでいる、様々な形や大きさのヨットが他にもあったが、そのすべてがオズボーン号から一定の距離を保っていた。まもなくそのメインマストから王旗がひらめくであろう。

それから儀式があったが、その魔法はバーティーの期待を決して裏切ったことがなく、兄や妹はいつも楽しみにしていた。王室の遊覧客船が防波堤に横付けされたが、それは晩餐の用意ができたテーブルのように輝いていて、水兵たちが鉤で固定し、海軍大尉がタラップのそばで気をつけの姿勢をとって立っていた。遊覧客船は、唯一の煙突から出る黒い煙りに至るまで、オズボーン号のミニチュアといった様子だ。それからみんなは乗船し、天幕の下に腰を掛け、その汽艇は、船尾にある小さな、懐古的な蒸気エンジンが次第に回転を速くするその音に合わせて、スピードを増していった。

「フーレイ！　船が出たぞ」バーティーは叫びたいのを押さえることができず、デヴィッドに蹴られてしまった。「それじゃだめだよ。『出帆』と『前進』さ。そんなことも知らないのかい」と彼を叱った。

アリックスは何も言わなかった。彼女はしばらくの間話しを止めて、「戦艦ビナフォア」（サヴォイ・オペラの一つ）にある歌を静かに口ずさんでいた。

俺たちゃ青い海を行く
おしゃれな船は別嬪だ
俺たちゃしらふで忠実だ
仕事は絶対やりとげる

汽艇が横付けされた時、オズボーン号の船長、英国海軍大佐チャールズ・ウィンダムが、タラップの先にいた。甲板長がラッパを吹き鳴らし、ウィンダムと副司令官が敬礼をしてまっすぐに立っている。最も印象的だったのは、白い夏服を着たクルーがいつもの場所についてこのヨットを飾っていたことである。大佐は、彼にのしかかる不安のかけらも見せず、皇太子妃の質問にも、まるで時間があり余っているかのように答えた。海軍中将ジョン・フラートン卿は、彼が初めにこの会見を取り決めた時、皇太子がいつもいらいらするほど皇太子妃が時間の観念を持ち合わせていないことを警告し、十分間の余裕を与えていた。それでは十分でないし、ロンドンから来る王室の到着に合わせて、この人数こそ少ないが、高貴な人々をポーツマスまでお運びする単純な任務が手に負えなくなる危険があった。

オズボーン号はブイから解き放たれて、ドキドキするような、物凄いスピードで水を掻き分けながら、スピットヘッドを北東に

進んで行った。非常にたくさんのマストと百ヤード以上もある軍艦、舞い上がる鶴と英国海軍工廠を作っている建物、教会の尖塔とポーツマスの高い建築物、こういったものの背後に、小高い草原地帯が暑い靄の中に見えてくる。百年前にナポレオン・ボナパルトからこの重要な海軍工廠を守るため、これらの丘の麓に建てられた大きな砦は見えなかった。またオズボーン号からは、まだ港内に浮いている戦艦ヴィクトリー号の巨大な船体も見ることはできなかった。しかしデヴィッドとバーティーはネルソンの錆ついたこの旗鑑を案内してもらったことがあり、水兵であった彼らの父ジョージの口から聞いて、フランス軍の侵攻と征服からイギリスを救ったネルソンのトラファルガーにおける大海戦の話しをよく知っていた。ヨーク邸にあるバーティーのベッドの上には、彼ら自身が今ゆっくりと近づいている埠頭の階段を降りて来る片腕、片目の英雄ネルソンの絵が掛けてあり、それには彼が最後の大勝利になる戦いと彼の死に向かうため、ヴィクトリー号に乗船しようとする一方で、群衆は手を振ったり、歓声を挙げているところが描かれている。

王室の一行は埠頭に立っていた。メイ・ヨークは、長く、黒いコートで、襟元には毛皮を巻き、たくさんの果物と花を飾った、堂々とした、物凄い大きさの帽子を被っていた。「彼女はよくこの暑さに耐えられるわね」アリックスはトレッドゴールド夫人に大きな声でそう言った。その一行の中には他に何人かの女官がいたが、そのすべてが、そして三人もの侍従がヨーク公爵夫人を見習おうと帽子を被っていた。

しかしその存在によって彼らすべてを支配しながら、皇太子のバーティーが立っている。彼は、年老いた母が亡くなった時、エドワード七世となるのである。海軍元帥の制服を着て、腕には黒い腕章を付けていた。五十八才である。息子とは違って、自分のまわりの者におしゃべりをしていたが、オズボーン号が埠頭に横付けされるやいなや、自分の三角帽子を脱いで、妻と孫たちにそれを振った。「フーレイ!」と叫んだが、たったその一言からも彼の喉音のアクセントが明らかだった。「ずいぶん遅くなったが、ポーツマスへよく来たね」彼は孫たちの方へ投げキッスをして、彼のそばにあるキャプスタンほども大きな葉巻を口にもどした。

数分後ジョージ・ヨークは二人の息子と握手を交わしていた。「お行儀は良かったんだろうね」と疑いを隠そうとしない声でそう言った。それから娘のメアリーにキスをして、やっと彼の顔に微笑みが浮かんだ。それとは対照的に、彼の父はデヴィッドを抱き上げようとするつもりになって、不満そうに叫んだ。「大きくなったのう」バーティーも同じように言ってもらった。それからメアリーを見て、葉巻を侍従の一人に渡し、屈んで、彼女を抱き上げた。彼女はその髭が気持ち良く、擽ったいので、うれしそうにはしゃぎ声をあげ、首に手をまわして、「大好きなおじいちゃま」と言った。

メアリーは、母親からはもっと形式的なキスをしてもらっただけであった。メイは息子たちと握手をしたが、唇にはあのかすかな、恥ずかしそうな笑みをちらっと浮かべていた。今日は八月八日である。彼女は十七日にスピットヘッドを渡り、バーナード卿夫妻の住むラビー城に向かうであろう。そうすれば解放されるのだ。何と心が休まることだろう。彼女はひどく疲れていた。この子供たちがいらいらさせているのだ。

4

ということでメイ・ヨーク公爵夫人は疲れていた。半分目が見えなくなっている女王はその晩オズボーン・ハウスにおける晩餐でこのことに気がついた。どういう理由から彼女は疲れているのだろうか。抜け目のない老女王はテーブルを見つめたまま、この若い女が孫の良き妻になると申し出た時の彼女の第一印象を思い出して、少し憤慨しながらこのことを考えていた。「メイ・オブ・テックですって？　彼女はだめでしょう」やっぱり彼女の直感は正しかったのだろう。メイはアリックスと同じような強い精神力を示さなかった。どんなダンスに長男アルバートは可愛いアリックスを誘ったことがあるのか考えてみるがいい。しかし彼女は不平一つ洩らさなかった。次から次へ変わる浮気の相手、二、三年前まではウォリック夫人であり、現在はジョージ・ケッペル卿夫人である。女王はかつて女官の一人に洩らしたことがある。「どうしてあのアリックスが我慢しているのか理解できないわ」ところが己が人生の運命について不満ばかり言っているのは、夫のジョージが一度も浮気をしたことがないメイの方であった。彼女には、今朝写真を撮る時に、セーラー服の上下を身につけて、芝生の上で女王のそばに座っていた素敵な子供たちもいるのである。

女王はスープを少し掬ったそのスープ皿をほとんど見ることはできなかったが、メイが明らかに子供たちに対する愛情に欠けていることを見逃すことはなかった。彼女はほとんど子供たちを避け、必要な時にのみ彼らに触れるだけである。少なくともそのように思われた。衝立ての後ろで演奏している英国軍楽隊や、食事中海ガメのスープを掬う時、マイセンの陶磁器に銀食器がぶつかる、そういった控え目な音楽や雑音に合わせてヴィクトリア女王は、自分が死んだ後君主としての支配を引き継ぐであろう、彼女のまわりでテーブルに腰掛けている者たちについて一人一人静かに考えていた。

彼女自身自分の死がそれほど先のことではないとわかっていた。心臓はひどく不規則になっていて、ベッドで寝返りを打つと、時々胸に痛みを憶えるのだった。まもなく彼女は最愛のアルバートに再会するに違いない。この数十年を経た後、再び彼に会ったら何と言おう。女帝も新兵も変わりなく、すべての人間が行くことになっている、あの神秘的な世界において。

ヴィクトリア女王が家令のパテイルをちらりと見ると、そのイ

ンド人はすぐに手を挙げて、給仕にスープ皿を片づけるように合図を送った。それから彼女は右手に座っている長男の方に至極ゆっくりと向き直り、尋ねた。「来週はどこにライチョウを射ちに行くのですか」

こういった数少ない言葉で、食事の席の会話は権威づけられたし、またささやく声もあちこちから聞こえてきた。皇太子は女王に、彼が「栄えある十二日」にライチョウを射ちに行こうとしている北ヨークシャーの領地のことを話し、国内のこと、また社会問題についてお喋りをしたが、いつものように国事に関してはまったく触れなかった。それから彼が非常に心配そうに低い喉音で女王に、「母上、お加減はいかがですか」と尋ねた時、彼女は彼が言わんとすることがわかった。というのは弟のアフィーがドイツで死んでから一週間も経っていず、昨日葬儀から帰ったばかりだったのだ。誠に皮肉なことだが、そこにいる間に、彼がとても愛している姉も末期のガンに罹っていることを知らされた。天晴なことに、彼は固く秘密を守ることを誓ったが、昨晩は、彼の愛する母が姉よりも早く天に召されて下さいと祈りながら泣いていた。

そう、死はすぐ目の前に来ていると、女王の長男である皇太子は気づいた。というのもアフィーが死んだ日、イタリアの王が無残にも暗殺されていたからである。現在オズボーン・ハウスのこのテーブルで、彼はその恐ろしい事件から、一八七〇年のアフィーの暗殺未遂へと思いを巡らせた。女王を元気づけようとして、彼は言った。「母上、オーストラリアであのアイルランド人が彼を撃ち損なった時に、彼が死んだということにしましょう。つまり神が三十年の貴重な人生を彼に余分に与えてくれたのです」

「そう、本当にあなたの言う通りだわ。そして今までのところあなたの人生を四ヵ月延ばしてくれたのね」彼女は、四月にベルギーを訪問した時のことを彼に思い出させて、少し微笑した。一人のアナーキスト学生が車両の開いた窓から彼を狙撃したのであった。女王の微笑は、めったに見られないのと、その自然な輝きで大変な価値があった。その輝きは、穏やかな時の彼女の口の表情、つまりほとんど逆さになった「U」のようなのだが、それと強い対照を表していた。

この微笑が皇太子にもたらした暖かさや快活さは、サーモンが片づけられ、巨大なサーロイン・ステーキがレインジャーによって切り分けられる前に失せてしまった。食事が終わって女王と他の女性たちが出て行った後、彼はひどく憂鬱になった。他の男性たちは彼らで男同士の話しをしていたが、やっと息子がテーブル越しに声をかけた。「父上、今夜は随分お静かですね。どうかなさったのですか」

「ああ、そうなんだよ」彼はタバコを置いて、今度は葉巻に火をつけた。「人が死ぬという問題で頭が一杯なんだ」

ウィンダム大佐は、テーブルの向こうの端にいて、かなり飲んでいたが、失礼して口を挟んだ。「閣下、それよりも生について

考えて頂きとう存じます。そして老いということよりも若さについてお考えになって下さい」

皇太子は少なからず驚いて、彼を見たが、この海軍士官のでしゃばりには腹をたてないことにした。なぜならその意見はかなり妥当性のあるものだったからである。「そうだね、ウィンダム大佐、君の言う通りにしよう」ジョージがいることで、彼が深く愛している三人の孫のことを思い出した。明日は、午後ロンドンに発つ前に、芝生で一緒にふざけっこをしようと心に決めた。あの子たちはいつもそれを喜んでいるし、彼も楽しかった。悲しいことに、ヴィクトリア女王は、長女の手の施しようのない病気について知ってしまい、それが、一九〇〇年の末頃から彼女を襲った絶え間のない憂鬱をいや増した。「ご気分がすぐれないようだ」とジョージはメイに女王の健康状態について書いている。南アフリカの戦況はさらに良くなったというのに、兵士たちは未だにあの草原で死んでいる。追い打ちをかけるように、女王は十月になって、孫のアルバート・ヴィクター公が腸チフスで死んだことを聞いた。十二月九日付けの日記を末の娘に書きとらせる。「みんなは私が良くなっていると言うが、気分がすぐれない」

彼女は良くなってはいなかった。クリスマスに彼女の最も旧くからの親しい友人であった、女官のジェイン・チャーチルが死んだ。「私のまわりでみんなが亡くなっていく。私はますます一人ぼっちになる」一年の変わり目における前例のないような冬の嵐の最中、彼女は心身共に疲れていった。「新しい年が始まる。私は弱り果て、悲しみに打ち拉がれて新年を迎える」彼女は二十世紀に長い間留まることはなかった。

一月二十日すべての子供たちは、デヴィッドが風疹に罹ったので、ヨーク邸で隔離され、両親でさえも、彼らが一日一回の元気な散歩を除いては、閉じ込められたきりの子供部屋を訪ねることはできなかった。そうしたある朝フィンチが勉強部屋に入って来て、重々しく告げた。「お母様とお父様はワイト島にお呼ばれになりました。大おばあ様がご危篤なのです」

子供たちは馬車が寄せられる音を聞き、母と父が正面玄関から急いで乗り込むのを窓から見つめていた。子供たちは手を振ったが、ジョージとメイは見上げなかった。それから馬をおもいきり走らせて、馬車道から駅へと向かった。デヴィッドは刺すような不安を感じ、自分たちが新しい世紀と同時に新しい時代の幕開けにいるのではないかと思った。

一九〇一年一月二十一日、つまり翌日の晩、この老女王は、巨大で、散らばった一族の中で、その場に間に合うことのできた者たちによって看取られながら静かに世を去った。ラーラは子供部屋でまだ上の三人の子供たちと一緒に眠っていたが、翌日の朝七時にこう言って彼らを起こした。「女王様がお亡くなりになりました。国中が喪に服すのです」そのように言われると随分通り一遍のように聞こえるのだが、それはイギリス王室にとっ

て、一六六〇年の王政復古以来最も重要で厳粛な事件なのである。ラーラが教えるところによると、女王陛下は彼女が生まれる二〇年も前から国を治めてきたという。すると子供たちにはラーラがひどく年をとっているように思われた。

その日後になってフィンチと一緒に森の散歩に出かけた時、彼は突然彼らを止めて、「聞いてごらん」と言った。少しの間そうしているとメアリーが聞いた。「何が聞こえるの?」「この静けさを聞いてごらん」と彼は答えた。確かに銃声も、鳥の鳴き声も、列車の音もしなかった。風でさえも女王のように絶えてしまった。大変な静寂が国中を覆っているようだ。その時、突然驚いたように一羽の雄のキジが、羽を慌ただしくばたつかせ、激しく鳴きながら彼らの頭上を飛んで行った。

「どんなふうになると思う、デヴィッド?」ウィンザーと葬儀への旅支度をしながらバーティーが聞いた。デヴィッドなら知っているだろう。彼はなんでも知っているから。「そうだな、大勢の人がいて、ガンガンの体が入った棺があるんじゃないかな」

「大おばあ様が死んだところを見るの?」バーティーは、老女王が生きていた時、(彼女を困らせたことに)一緒にいて時々ワッと泣き出すことがあったが、大おばあ様の死体を見てそうなるのかなと思った。

「馬鹿だなあ、蓋には釘が打ってあるんだよ」

メアリーは、その会話を聞いて、恐ろしくなり、釘付けにされた箱の中に入るというのはどのようなものかしらと思った。おそらく泣き出してしまうだろう。その時黒いスーツに黒いネクタイを絞めたフィンチが入って来た。顔つきは厳しかったが、いつものように冷静である。

彼らは王室用の列車には乗らなかった。その代わりに特別な車両を十二時五十五分発のロンドン行きに連結した。ラーラはハリーの世話をするために後に残り、他の子供たちは見習い育児婦のウェーヴァリー嬢(「バン」ともいうのだが)、フィンチ、最近になってフィンチの手伝いをするために雇われた十六才の少年に付き添われて行った。

平らなイギリス東部のひなびた風景の中を、畑に映る蒸気機関の煙りの影と競争しながら疾走して行くと、彼らの旅の目的もすぐに忘れ、普段のようになった。つまり彼らはクスクス笑ったり、身をよじったりし始め、押し合いへし合いしながらあっさりゲームを始めたのである。フィンチは文句を言わなかった。彼は物分かりの良い男であるので、幼い子供たちには、一日中葬儀のための謹厳さを保つことは無理なことであると認めていた。しかしロンドンに到着する少し前に、彼は子供たちの身なりを整え、彼らの責任についてのお説教をした。「あなた方のような年若い子供たちが、葬儀に出席なさるのは本当に珍しいことなのです。お分りのように、お父様はお体の具合が悪く、ご出席できませんし、

お母様もオズボーンでご看病なさっておいでです。ですからあなた方は新しい王様の年長のご子息で王位継承者のご名代なのです。ウィンザーではあなた方の立ち居振る舞いが判断されるのですよ」彼は微笑んだ。「もうつねったり、ぶち合ったりしてはいけません」

可哀相な父親は、用心の甲斐もなく風疹にかかってしまった。彼はオズボーンの二階で寝ていたが、死んだおばあ様が、白いドレスに、結婚式の時のレースのヴェールと白い未亡人用の帽子を着け、手には銀の十字架を持ち、階下で正装安置されていた。しかし明日にはこれを最後としてオズボーンを離れ、大きな悲痛の中にも壮麗さをもって、スピットヘッドからポーツマスへ運ばれて行くだろう。その翌日棺はロンドン行きの列車に積み込まれる。そして列車がその地方を走り過ぎる時、何千という彼女の臣民が膝まづき、冥福を祈るであろう。

しかし女王の特別な命により、ロンドンの通りは黒で飾られてはいなかった。そしてヨークの三人の子供たちが、彼らのことをそれと分かる者たちすべての歓声を受け、王室の馬車に乗り、通りを走って行くと、人々のみが喪に服していて、白いサテンのリボンがついた紫色のカシミアの掛け布が、旧い治世を悲しむというよりも新しい治世を祝っているように見えた。

その日は子供たちがロンドンへやって来るのにうってつけの小春日和であった。しかし夜になって天候が変わり、フィンチはベッドから起き上がり、ウィンザー城の子供部屋の火に二度ばかり薪をくべなければならないと感じた。その結果彼はほとんど眠ることができなかった。責任というものに慣れていたけれども、彼には厄介な時期であり、バーティーは特に心配であった。彼は今のところ風疹は免れていたけれども、ほとんどいつも最初に病気にやられるのである。

厳しく、冷たい東風が城壁のあたりで鳴っているので、フィンチは儀式の前はできるだけ子供たちを部屋にいさせておいた。それから彼らが寝泊まりしている客室を仕切っている石の廊下を案内して行った。そこは低いところにあり、暗くて、肌寒く、中庭に通じる石の階段があって、渦巻く東風の影響をもろに感じた。中庭から喪服を着た、たくさんの婦人や紳士が三々五々セイント・ジョージ・ゲートウェイに向かい、そこからゆっくりと、まばらではあるが、列になって、丸い塔と低い棟を通り過ぎ、セイント・ジョージ・チャペルの入り口に着いた。この身分の高い人々の中でも三人の子供たちは目立っていて、たいへんな興味と概ね好意的な関心を集めた。他にも何人か子供たちが交じっていたが、ヨークの三兄弟ほど小さくはなかった。デヴィッドとバーティーの二人は黒いビロードのスーツにウイング・カラーのワイシャツ、そして半ズボンをはいていて、山高帽を被っている。一方メアリーは、毛皮の縁どりがある黒いコートの下に長いビロードのドレスを着て、多くの人の微笑を誘っていた。「ゴルディ

ロックス（金髪の美人さん）！」すると彼女は、黄褐色の巻き毛も魅力的に、シンプルな、つば広の黒いビロードの帽子の下から目を上げて優しくそちらを見た。

聖堂の気品ある内部は、亡くなられた女王陛下の指示通りに、温室の花が盛り沢山に飾られていて、案内がフィンチと三人の子供たちを横の通路から、ある公爵の、横たわった彫像のある古い墓石のそばを通り抜けて、彼らの席に導いた。可哀相に、まだ四つにもならないメアリーは、当惑し、この出来事すべてに恐くなって、あの横たわる石で出来た人物が、もし大おばあ様の亡骸でなければ、確かに他の誰かの死体であろうと想像して、震えながらそれをじっと見つめていた。彼女は一言も声を出さなかったが、フィンチの隣に座って、彼の手をきつく握りしめた。

幼い子供だけは安堵を見出だすことができる世界から、メアリーがまったく阻害されてしまう一方で、パーティーは不思議と不安の入り交じった気持ちであたりを見回していた。そこは小さなサンドリンガムの教会とは対照的に非常に大きかった。またいつもは家族が彼のまわりや後ろにいて、内部や戸外にいる者も知っている、安心できる顔ばかりなのである。

かたやデヴィッドは次第に落ち着きがなくなって、不機嫌な気持ちがつのっていくのを感じていた。なんていう時間の無駄使いだろう。彼は後に記している。「あの出来事は言い尽せないほど悲しいことだった。間違いなくあの場面に居合わせた年配の人たち、また分別のある人たちは、平和と安心の偉大な時代が過ぎ去ったという思いに駆られたことだろう。そしてイギリスの運命を変えると同時に、彼らの人生にも深く影響するような、避けがたい変化を予感していただろう。しかし七才（実際には六才）では自分の運命に対する感覚は限られているし、歴史的な悲哀を味わうのはさらに困難である。今思い出せるのは刺すような冷たさと果てしのない待ち時間だけである」

その重要な、氷るような寒い一日で最も長く待たされたのは、女王その人であった。一生涯時間厳守を実行してきた彼女としては、最後に公衆の面前に登場することが、予定表通りに進まないのはおもしろくなかったであろう。棺を乗せた砲架車の到着が遅れたのは、天候と、駅から聖堂の入り口まで棺を運ぶことになっていた王室騎兵砲隊の馬に対するその影響のためである。

馬は一時間半も待ち続け、棺が列車から砲架車に運び込まれ、据え付けられた時はすっかり冷えて、かなり神経過敏になっていた。そのうちの一頭が、この苦役がいやになり、後ろ脚で立って、引き革をだめにしてしまった。他の六頭もそれに倣い、それぞれの引き革を壊したので、無秩序と大混乱になってしまい、棺はもう少しで駅の前庭に投げ出されるところだった。

王室騎兵砲隊と騎兵隊がいくらかの秩序を取り戻そうと奮闘している間に、ある頭の切れる海軍大佐がこれを掌握した。「ルイス公がエドワード王に近づくのをはっきりと見ました」海軍分

遣隊の責務を負っていた他の海軍士官が報告している。「そしてそっと耳打ちされ、陛下は同意してうなづいておられました。それからルイス公は私のところにやって来られ、『武器を地面に置いて、砲架車を引く用意をし給え』とおっしゃいました」

もう一人の海軍士官がルイス公の指示で一目散に列車に駆けもどり、一分もしないうちに非常停止索を一本もって現れた。それは砲架車に固定され、ルイス公の号令で水兵たちがそれを目的地へと引っ張り始めた。王室騎兵砲隊の者たちは怒り狂ったが、王が海軍のためにとりなした。こういった場合陸軍よりも海軍の方が役に立つことがわかったのである。「彼にすべて任せておき給え」と、王はルイス公についてこう申し伝えた。

この危機を収拾したのは、バッテンバーグのルイス公大佐にとって時宜を得たことであるように思われた。なぜなら彼は亡き女王の可愛がっていた、孫の中で最も年若いヴィクトリアと結婚していたからである。彼らの幼い息子はディッキー[2]といった。

5

風疹と隔離、ひどい天候とヴィクトリア女王の葬儀という辛い義務、その余波などで、一九〇一年の初めの数週間はデヴィッド、バーティー、メアリーにとっておもしろいものではなかった。それに加えて「大旅行」があった。女王の亡くなるだいぶ前に、両親は王室旅行に出かけることが決定していた。どんな素晴らしい旅行になることだろう。ジブラルタル海峡、マルタ島、ポート・サイド、コロンボ、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、カナダ・・・。ジョージ・ヨークがいつか支配するであろう大英帝国、南アフリカ戦争の間施した援助のために、母なる祖国としての感謝に値する大英帝国である。

メイは海が大嫌いでこの旅行のすべてを恐れていた。葬儀の後ヨーク邸ではみんなが不機嫌になっていたが、このような状況ではいつもそうであるように、使用人はその雰囲気に影響され、ラーラの明るい性格も曇りがちだった。

しかしながらこの苛立ちと不機嫌のもう一つの原因は、新しい国王が、習慣となっているように子供たちの両親を皇太子とその妃にできなかったことである。彼はただ「ヨーク」という公爵の称号の前に「コーンウォール」という肩書きを加えただけであった。少なくとも当分の間彼らはそのままの地位に留まることになった。とはいえこの手抜かりはその後国王によって補正されたのだが。しかしヴィクトリア女王はかつてこのように書いている。「誰でも公爵になることができる。しかし王家の者だけが王子と呼ばれ得るのだ」そして今彼らはこの長く、疲れるであろう、大英帝国を巡る旅に出て、ただの公爵夫妻として何千という人に会おうというのだ。ジョージとメイにつき従うすべての者、つまり秘書、執事、侍従、女官、召し使いなどが、この伝統の断絶に激怒した。メイの家族はどうであろう。彼らもまた然りである。こ

の知らせを告げたメイの手紙に伯母が往信した。「正当な伝統的称号をあなたとジョージが引き継いで、有することがないなんて私の怒りは治まりません。旧き伝統を覆すほどひどい誤りなのです。どうしてなのでしょう？　彼（エドワード王）が永遠に玉座にいるからなのでしょうか？　他にどう考えられます？」春になって突然子供たちの生活は一変した。一九〇一年三月十六日、彼らはもう一度ポーツマスへ旅をする。今度は王室列車に乗り、新しい国王と王妃（おじい様とアリックスおばあ様）、父と母、そしてドイツとイギリス在住のたくさんの王族と一緒だった。列車は途中で何度も駅でスピードをゆるめた。プラットフォームは歓声を送る人で一杯になっていて、前の月に亡き女王を泣いて見送った市民たちとは対照的であった。

午後になって子供たちは両親の船を見に連れて行かれた。「きれい！」とメアリーは客船オファー号を初めて目のあたりにしてそう叫んだ。誰もこの判断に異論を唱える者はいない。この客船は全体が白で塗られていて、船首から船尾までメイン・デッキの高さに黒い一本のラインが入っている。またがっしりしてはいるが、優雅に釣り合った二本の煙突があり、そこから煙りがとぎれとぎれに青い空へ昇って行く。そして船の中央には人目を引く切り込みがあり、それが船全体に特別な印象を与えていた。船長は英国海軍アーサー・ウィンズロー准将で、この公爵夫妻のために、彼の下にはさらに二十七人の海軍士官、百二十五人の下士官、全体で五百二十五人の乗組員がいた。

ウィンズロー准将は彼らをデッキの下の宿所に案内した。そこにはそれぞれ広いキャビンと居間があり、それらは象眼の施された、ローズウッドとマホガニーの羽目板細工になっていて、床（ほとんどデッキとは言えない）には、メイによって特に選ばれた、微妙な淡黄褐色の深々としたサクソニーの絨毯が敷かれてあった。それから青い皮張りをした椅子のある喫煙室と書斎、樫材で出来た壁と五十六人掛けの長いテーブルのあるだだっ広い食堂を見に行った。

別れを告げる時が来た。メアリーの五度目の誕生日はまだ四週間先である。彼女は十一月まで再び両親に会えないということがどういうことなのか分からなかった。ママがなぜ泣いているのか、さよならのキスをした時、ママの頬がどうして濡れていたのか分からなかった。それまでにはなかったことなのである。しかしみんなが（パパでさえも）泣いているようなので、彼女も自分に期待されていることをして、ワっと泣き出した。お兄さんたちでさえパパにキスをされていたが、これもまた初めて目にすることである。今日は何と特別な日なのだろう！　それからフィンチが彼女の手を取り、少年たちを連れてその場から離れて行った。

しかし決してこれだけでは終わらなかった。新しいペンキと熱い油の臭いがする王室のヨット、アルバータ号に乗船した時、デヴィッドとバーティーは特にワクワクしていた。おじい様とア

リックスおばあ様はすでに船に乗っていて、おじい様はヨット用の帽子を被り、風が入らないように襟を立てて、体にぴったりした短い上着を着ていた。一方アリックスは銀ギツネのコートにくるまって、厚いヴェールで顔を覆い、帽子を押さえていた。国王自身を含むすべての者が出立に際しての昼食会で泣いたのだが、幸いにも子供たちはそれに出席しなかった。デッキの上で彼らの姿を見るまで、彼はまだかなり打ち拉がれていたようであった。すぐに彼はかがみこんで、ひどく痛々しそうに微笑み、彼らを代わる代わる抱き締めて挨拶した。

「ジョージのペットたち！」とアリックスは、トレッドゴールド夫人をそばに控えさせて、彼らに加わろうと、デッキの上を足を引きずりながらやって来た。彼女がまた子供たち一人一人にキスをしている間、ヨットはすでに港を出て、スピットヘッドとイギリス海峡に向かって進んでいた。「おじい様と私がこれからあなたたちの面倒を見るのですよ。ちょうどおじい様がお父様で私がお母様のように」彼女は恐い顔をしようとしたが、実際には微笑んでいたのであり、すぐに大笑いしてしまった。「ですから本当にいい子にしていなければなりませんよ」

三人の子供は皆、両親を乗せたオファー号の出帆した日を鮮やかに憶えていた。王室のヨットはオファー号の二マイル先を進んでいたが、この客船は、ソーレント（イングランド本土南部とワイト島の間にある水道）の波頭を突き進んで行く時、「童話に出てくる白い船」のようであった。それからヨットは十六ポイントのところで折り返し、ポーツマスに向かって行った。するとオファー号は二〇〇メートルも離れていないところを通り過ぎた。

ジョージとメイがブリッジの袖のところで手を振って立っていた。それから客船は三度サイレンを鳴らしたが、ヨットはそれに応答した。メアリーは毛皮の手袋をした手を耳に当て、顔をしかめていた。一、二分もすると両親の姿はほとんど見えなくなった。それから彼らは風除けに入った。同時にアリックスは中に入る時間だと一人で決めてしまった。「暖かいところに参りましょう」震えながら笑って、メアリーとバーティーに腕を廻し、そう叫んだ。愛情をなによりも優先し、自分の具合の悪い足もかばってのことである。メアリーは両親の出立で深刻な喪失感を味わった、三人の中の唯一の子供であった。少年たちは、もし後年尋ねられたら、緊張からの解放感で一杯になったと正直に答えるであろう。メアリーはサンドリンガムにいて五回目の誕生日を迎え、母と父をまだ恋しく思ってはいたが、ずっと明るくなっていた。プレゼントに三輪車をもらい、彼女は目を見張るほどの早さと勇気で乗りこなした。もちろん学業はあった。ところが・・・。

エレーヌ・ブリカ嬢が二人の少年とメアリーに彼らの初めての勉強を教えることになっていた。通称「ブリッキー」は、若い頃のメイ公女に教えたことのある、アルザス出身のがっちりした、

丸顔で、年配の女性だった。彼女にははっきりと分かるフランス語のアクセントがあり、優しい心の持ち主で、腕白少年とお転婆娘を相手どる能力はほとんどなかった。実際子供たちは彼女が大好きであったのだが、彼女はからかうのに絶好の獲物であり、それが彼らの最悪の部分を引き出してしまった。両親が旅に出て行った後、ブリッキーの仕事は一層困難なものになった。「アレグザンドラ王妃は、愉快に過ごすことは勉強よりも大切だといつも信じていらっしゃいました」と女官の一人が彼女の備忘録に書いている。「そしてエドワード王も、ご自分が学業のことでたいへんだったものですから、教育が良いことだとは思っていらっしゃいませんでした。特にご自分が理解し、愛していらっしゃるお孫さんたちにとっては」

デヴィッドは、オファー号が出航して間もなく、マールボロ・ハウスに滞在していた時に、このような意味で典型的な場面があったのを憶えている。「おじい様とおばあ様が一緒に昼食を取るお相手がいない時は、私たちが自分たちの食事を終えてから、しばしばお二人の食堂に降りて行って、食事をなさっている間、まわりで跳ねまわり、お二人とおしゃべりしたものだった。

このようなくつろいだ雰囲気の中にいると、ブリカ嬢がフランス語とドイツ語の入門書を携え、上で私たちを待っているなどということはすぐに忘れてしまうのだった。私たちがあまりぐずぐずしていると、彼女は恐る恐る食堂に入って来て、すでに勉強の時間になっていることを告げるのである。大抵おばあ様は彼女に手を振って出て行かせ、おじい様は葉巻の煙りを吐き出して、この家庭教師に念を押すように付け加えた。『かまわんよ。子供たちにはもう少し一緒にいてもらうから。じきに上へやることにしよう』」

それからデヴィッドは、子供たちがロンドンからサンドリンガムへ向かった時、国王と王妃はいかにしてブリカ嬢を残して行くように計らったかを詳しく語っている。

サンドリンガムはブリカ嬢からの解放という以上の意味を持っていた。それは来る日も来る日も、好きなことがほとんどすべてできるということなのである。水仙とブルーベルが森の中で特別たくさん咲いているような、特に美しい春である。彼らは主に砂利の車道を自転車（メアリーの場合は三輪車だが）に乗って過ごした。デヴィッドはバーティーを競争に誘ったが、いつも勝っていて、メアリーもそれに加わると言って聞かなかった。何度か転倒したのだが、メアリーは向こう見ずな性格から、たいへんなスピードで倒れて、膝をひどく切ってしまった。その時彼女は一人きりで、涙を堪え、靴も履いていない足に血を流しながら家へ帰った。

「ほとんど痛くなんかないのよ」と、傷の手当てと包帯をしてもらいながら、彼女はラーラにやせ我慢をして言った。次ぎの日彼女は三輪車に乗ったが、包帯がずり落ち、それで膝が思うように動かなかった。

晴れた午後には、フィンチが海へ連れて行ってくれて、そこで

水切り遊びや他にもたくさんのゲームをした。舟遊びをするにはまだ寒いのだが、それでも子供たちはわざわざ濡れるようなことをするのであった。

6

一九〇一年の十一月に両親は大英帝国内の旅行から帰って来た。彼らが皇太子と皇太子妃という、遅ればせだが、新しい称号を喜んでいる一方で、子供たちの自由は突然終わりを告げ、彼らの生涯にわたり、あのような呑気で、無垢な時代は再びやって来ることがなかった。デヴィッドは、彼らがロンドンに来た時に滞在する、ヨークの住居となったセイント・ジェームズ宮でのある朝のことを憶えている。

「バーティーと私は、父がドシドシ音をたてながら階段を上がって来るのを聞いた。父は人目を引くほど重い歩き方をしていたが、その朝はそれまでになく不吉に響いたのだった。その上、父が私たちの部屋にやって来るということはめったにないことなのである。不安を感じながら、ドアが開くのを見つめていたが、開いた時、父の隣には背の高い、痩せた、大きな口髭のある、厳しい表情の見知らぬ男が立っていた。

「父がぽつりと言った。『こちらが新しい家庭教師のハンスル先生だ』そして父は部屋を出て行き、私たちとハンスル先生だけにした・・・」

この教師と教え子との出会い、または対面はかなり以前に決められていたのだが、少年たちの両親のどちらも、息子たちに知らせる必要はないと考えた。実際ハンスルは彼の将来の教え子たちがどのようなものか判断するために来ただけであり、あまり嬉しそうでもなく、また熱意があるようでもなく、授業は四月の末から始まるからと言い残して間もなく出て行った。

ヘンリー・ピーター・ハンスルはその時三十九才であった。彼は典型的な、ヴィクトリア朝におけるパブリック・スクールの先生であり、独身で、戸外の生活を好み、パイプを吸い、スポーツが好きで、実際的であり、動作がきびきびしていて、特別な学問的業績には欠けていたが、イギリスの樫の大枝のように、物に動じない、信頼できる人であった。「私たちは疑心暗鬼というのではなく、用心深く、不安そうな目つきで彼を眺めたものだった」とデヴィッドは言う。バーティーは敬愛を表わすのが早いのだが、彼もまた逆説的に兄よりも将来に対して不安を憶えた。しかし結果的に、彼らの家庭教師の衝撃は、一九〇二年の四月の晦日にヨーク・ハウスに帰ってから、彼が最初に行なった授業のやり方で和らげられた。このように遅れたのも、王室にとってたいへん重要な出来事が差し迫っていたからである。六十四年ぶりの戴冠式に他ならない。

ハンスルは、二人の教え子には歴史の基礎学習が必要であると賢明にも判断した。彼らは、数学や地理や科学よりも歴史が苦手

であった。その上、ハンスルはオックスフォードのモードリン・カレッジで歴史を教えたことがあり、当然他のどの教科よりもそれを教える方が嬉しいのである。それで五月中のかなりの日数、彼はフィンチに、子供たちが十分服を着ているようにすることを頼んで、ヨーク・ハウスまで馬車を廻して、彼と子供たちを拾うように手配した。

これはハンスルが言うところの「生きた歴史」であり、デヴィッドとバーティーはたいへん感銘を受けた。「とても楽しかった」とデヴィッドはこの時期について書いている。誰も彼らをロンドンの史跡や歴史的な建築物に連れ出し、国家の歴史から彼らの立場を説明することなど考えはしないだろう。「ここは、カンタベリー大司教がおじい様の頭に王冠をかぶせる時、おじい様がお立ちになられるところなのです。七百十三年前の一一八九年の五月二十五日にジョン王が同じ場所で王冠を戴いた時と変わりはないのです」それからデヴィッドに厳しい眼差しを向けて、「そしてあなたがいつか王冠を戴くのもこの同じ場所なのです」

デヴィッドは、彼の怒りと当惑を隠すため顔をそむけた。彼は、自分が未来の国王であることを人から言われるのをひどく嫌った。一度バーティーが歴史書の中にあるエドワード二世の肖像を指して、「おじい様とパパが死んだらお兄さんがこうなるんだね」と言った時、彼は思いきり弟を蹴飛ばして、部屋から出て行った。生涯を通じ、デヴィッドは王族であることの堅苦しさとそれにとらわれることを憎んで、子供の頃から彼を待ち受けるものを恐れていた。

しかしデヴィッドとバーティーはこれらの社会見学から多くのことを学び、彼らはテムズ川を船で下って、グリニッヂまで行ったり、反対の方角にはハンプトン・コートの宮殿まで行ったこともあった。

「一週間後におじい様は戴冠なされるでしょう。あなた方はその儀式のすべてを御覧になれるよう、良いお席に付かれると思います」と、ハンスルはある朝言った。

「はい、ミダー[3]（先生）」バーティーは言った。「わかっています」確かに誰が分からないというのだろう。遊歩道の中にはスタンドが建てられ、飾り付けもほとんど終わっていた。何千という英国国旗、他の国々の国旗、何マイルものリボンが、すべての街灯柱を飾りたて、ほとんどの窓から翻っていた。フランスやドイツから来た好奇心の強い人々から、ヨーロッパの君主たちに至る外国人で町は一杯になった。

しかし一度だけハンスルは誤ったことを言った。三日後に国王が倒れて、ウェストミンスター修道院で戴冠するまでもつかどうか、突然危ぶまれることになろうとどうして彼に知り得よう。

「もしおじい様が死んだら、お父さんが代わりに王様になるの？」バーティーは、寝かしつけられながらラーラに尋ねた。

「そうしたらデヴィッドが皇太子になるんだね」

ラーラは彼に暖かいミルクを渡した。子供たちのわずかな尊大さも抑制する術を心得ていたので、ラーラは機械的に答えた、「ええ、そうですとも」そうして、すぐにビアトリクス・ポターの『グロスターの仕立屋』を読み始めた。「剣や付け毛や裾のふくらんだ上着の時代には・・・」

階下ではメイ・ヨーク[4]がスコットランドの友人に宛てて手紙を書いていた。ロンドンはひどいことになっており、国王は明日にも手術を受け、盲腸の摘出はたいへん危険な手術であって、多くの患者が麻酔剤で死んでいる。その上国王はお年を召していて、あまり丈夫ではない。すべてが混乱していて、どうしたらよいか分からない親戚や外国の王族たちでロンドン市は溢れている。また彼らは帰国すべきか、国王が亡くなるか、回復されるまで待つべきかどうか分からないでいる、と彼女は伝えた。

国王は長い手術を耐え、しっかりと生き延びた。彼が麻酔薬の効果から醒めた時、最初に出た言葉は、当然のことながら、息子のことだった。「ジョージはどこにいる?」それから「国民は私を許してくれるだろうか」と尋ねた。そして最後に愛犬について聞いてから、眠りについた。国民が彼を許しただけでなく、安心と称賛の波が大英帝国全体を覆った。王室客船ヴィクトリア・アンド・アルバート号で短い療養を済ませた後、国王は遅ればせながら一九〇二年八月九日にウェストミンスター修道院で戴冠した。

常にそうであるように、戴冠の場面はたいへん華麗なものであった。「バーティーと私はキルトを着ていたように思う、またメアリーもそうだったに違いない。私たちは王室用となっているボックス・シートからこの儀式を見つめていた・・・」たとえ最後に行なわれた戴冠式から何年過ぎていようと、長い儀式は滞りなく運んでいたが、その時八〇代のカンタベリー大司教フレデリック・テンプルは、玉座への階段を昇っていた途中、王冠を手に持ったまま転びそうになった。しかしながら、彼が王冠を与えようとする当の大柄な人物に受け止められ、バランスを取り戻した。

戴冠式の日は、一九〇二年のひどい夏にありがちな、曇った、憂鬱な天候だった。さらに悪いことが続いて起こった。ジョージが国王とカウズにヨットで出ている間に、メイが子供たちをスコットランドに連れて行ったのである。翌年に与えるロンドンのマールボロ・ハウスとウィンザー・パークのフラッグモアの他に、国王はジョージにスコットランドのディーサイドにあるアバジェルディーと呼ばれる城を与えた。「アバジェルディーに君は満足すると思うが」と、ジョージは、比較的暖かいイギリス南部からメイにしたためた。メイはそれに満足しなかった。少なくとも初めのうちはまったく。それは冷え冷えとしていて、粗末であり、天候は最悪だった。

「本当にこの天候は嫌になります」とメイはジョージに返信し

た。「気分は憂欝で惨めです・・・。ここの庭はまだ明るくないし、美しくもありません」（八月の半ばのことである！）

バーティーは雨が降っていて、寒かったことを憶えている。彼の胃腸は度重なる不調に悩まされていた。その夏は体の調子もあまり良くなく、時々寝込むこともあって、その度に不機嫌になったり、短気をおこしたりした。しかし埋め合わせになるものもあった。この城は幽霊、暗い通路、地下牢、奥深い部屋で一杯であり、そこで子供たちは幽霊ごっこをしてお互いに脅かし合った。アバジェルディーには、蝙蝠の住みついた円屋根を持つ、高い石の塔がある。彼らはそこにキティー・ランキーの幽霊が出ると教えられた。彼女は魔女であると宣告され、城が見渡せる丘の上で火刑に処せられたという。

趣きの違う楽しみとして、風の強い日に、ディー川に架かっている、幅一フィートの吊橋まで出かけることがあった。彼らはその上で競争し、さらに大きく揺らしながら、お互いを負かそうとした。それから橋の中央まで小石を持っていき、川に落としたものだった・・・。

そしてその夏も終わり、一家はヨーク邸に帰ったが、そこではイギリス東部の平地がスコットランドのゴツゴツした、山の多い景色に取って代わった。毎日の生活は上の三人の子供たちにとって再び楽しみのないものになった。二階の一部屋が勉強部屋となり、ハンスルはそこで最高の権威を持ち、八才と六才になる二人の少年は真面目に勉強を始めた。メアリーの生活も重要な転機を迎えた。ラーラはハリー一人にかかりきりで、女性版の「フィンチ」が彼女の面倒を見るために任命された。エルゼ・コースカヴィッツはソーセージのように太っていて、優しく、陽気なドイツ人であり、プロテスタントのフランス人女性であった、初めての家庭教師ジョゼ・デュソーとはまったく違う人だった。

「マドモワゼル・デュソーは鋭い、まくしたてるような話し方をして、バーティーと私は、彼女が幼い少年たちにはほとんど役に立たないということがすぐに分かった。小さな悪戯が彼女の厳格な目には罪悪となり、すべてが詳細に両親の耳に入った。あれほど嫌っていた図書室に行く回数もずっと多くなった」と、デヴィッドは書いている。

ところがメアリーはすぐに彼女の勉強部屋の新しい方針が好きになり、規律と服従を尊重した。「驚いたことに、彼女はこういったすました態度を見習い始めた。『ママに言いつけるわよ』という脅かしは、めったに実行されなかったが、私たちをおとなしくさせる強力な効果を持っていた」と、デヴィッドは思い出す。

メアリーの伝記作者の一人が書いている。「この王女の生活は充実していた。彼女は七時に起きて、町にいる時はハイド・パーク、一家が城に住んでいる時はウィンザーの大公園で乗馬をしたものだった」

しかし乗馬をするにはサンドリンガムがお気に入りだった。そ

こは素晴らしく自由で、広々していて、何マイルもゆっくりと駆けて行くことができ、時々は疾駆することもあった。最も良いところは海まで走ってから、砂浜づたいに駆けることができるということである。

それからママが出かけていなければ、八時半に彼女と朝食である。そして九時半に勉強部屋に行く。フランス語、ドイツ語、地理、歴史の勉強。それからヨーク邸で一休みした後、かなり変わった科目だが行儀作法があった。もとはキャメロン派の神父で、スコットランドの高地地方出身のマッコイ先生（もちろん「ジョック」のことだ）が、デヴィッド、バーティー、メアリーに、「前へ進め、左、右、左、右、回れ右」という練習をさせに来ていた。「頭をそらして、顎を引きなさい。直立したままで前進」

一時にラーラとフィンチ、そして先生のうちの一人か二人が昼食を共にした。昼食の後は一時間裁縫とお絵書きである。それから自由時間となり、再び乗馬か、デヴィッドやバーティーと自転車に乗って出かけるか、でなければハンスル先生とクリケットをした。

バーティーは、あらゆる機会にゴルフを練習した。上手になりたいということもあったが、それ以上重要なことに、ハンスル先生に上手だということを見せたかったのである。

（メアリーの伝記作者が記している）ある日バーティー王子は妹に彼の素晴らしいドライブ・ショットを見てくれるように頼んだ。今度は本当に「ものにした」からである。それで彼らは出て行き、幼い王子は細心な注意を払って、ボールをティーの上に乗せ、打ち降ろすかまえをした。クラブは、三度ドンという音をさせながら地面を叩きつけ、芝生をあらゆる方向にまき散らしたが、ボールはやっと一フィートほど前にポトリと飛び出しただけである。王女は彼の惨憺たるショットを楽しそうに眺めて、もはや我慢ができず、叫んだ。

「バーティーお兄さま、そんなに暴れないで。気をつけないとボールをなくしますわよ」

彼らの父が考えている、少年たちの教育における重要性をさらに増大させ、また確かなものにするために、もう一人の先生が三階の勉強部屋に招かれた。デヴィッドは彼のことをこう憶えている。「イギリスに帰化した立派なフランス人で、黒い顎髭をはやし、禿げ頭であり、ガブリエル・ユアという本当らしくない名前をしていた」ユア先生は名目上、皇太子、皇太子妃両陛下の御一家に専属する公認司書として任用されていた。しかし彼の最初の仕事は少年たちにフランス語を教えることであった。その後、彼らがロンドンに滞在中、オイゲン・オズワルド教授なる人が彼らの頭にドイツ語を叩き込むために毎日やって来たのと同じことである。

このような一連の大変動にデヴィッドは落ち着きを保っていたが、より感受性が強く、精神的に不安定なバーティーには心を動揺させるほどの影響があった。現在、彼が直面しなければならない、今までとは違った真面目な生活に対する彼の哀れな反応については別の理由があった。おかしな話しに聞こえるかもしれないが、実際はそうでもない。それはX字脚なのである。この小さな欠陥を彼は父親から受け継いだ（多くの人が見たわけではないけれども、母親はその脚が完璧であることで評判だった）。幼年時代のごく早い時期における他の恩恵と共に、デヴィッドはX字脚を免れていた。

皇太子付きの一般内科医で、外科医兼薬剤師フランシス・レイキング卿は国王の命を救い、そのことだけでたいへんな尊敬を集めていたが、彼はバーティーの脚を真っすぐにするために添え木を勧めた。「あのおぞましい棒切れ！」と後年バーティーは話すだろう。レイキングは一九〇四年二月の上旬に初めて添え木を試し、と同時にその使い方をフィンチに教えた。というのはその矯正に最も責任を負うことになるのはフィンチだからである。数日後の二月十七日に、バーティーがお風呂から出て、フィンチが海軍用の鞭を入れるケースのような皮の紐と一緒にその恐ろしい器具をもって現われた時、バーティーはワッと泣き出して、彼のすねを蹴り始めた。

フィンチは、今にも癇癪を起こしそうな、彼のいつもの様子を見て、彼をしっかりと捉まえ、椅子に座らせた。フィンチも添え木が嫌いであり、朝と晩にそれを括り付ける仕事は有り難くなかった。「いいかい、バーティー。これはずっと続くわけじゃないんだ。バーナード先生の身体障害者のホームで見た、可哀相な少年たちとは違うんだよ。彼らは片足しかなくて、一生杖をついて歩かなければならないけれど」

「でもひどく痛むんだよ」バーティーは涙ながらに訴えた。

「ああ、分かるとも。本当に可哀相に思うよ。でもしばらくすればそれに慣れるし、君の脚が添え木のように真っすぐになったら、サンドリンガムで大きな焚火を焚いて、それを燃やしてしまおう」

この期待が少年を少し元気づけ、ベッドに入る前にそれをつけるのをフィンチに許した。添え木は一晩中そのままで、痛みよりもむしろ不快感を伴い、彼の目を何度も覚まさせ、そうなると再び寝入ることは困難だった。日中は六時間ほどもそれをつけていなくてはならないのである。

二月二十六日にバーティーは母に宛てて手紙を書いている。「これは一つの実験です。僕は脚に新しい添え木を付けて肘掛椅子や腰掛けに座っています。僕は使い古いされたテーブルを持っています。それは読書にはぴったりですが、手紙を書いている今、かなりぎごちなく感じています」それから彼特有の禁欲主義をもって、「じきに慣れるでしょう」としている。

しかしそうはならなかった。ある晩、バーティーはお風呂に入っている間、フィンチに泣き言を言い、さらに涙を流したのだが、その後でフィンチは不憫に思うのだった。勿論、その訴えはレイキングにも知らされ、彼がバーティーの父親にこのことを伝えた。そしてフィンチは、まるで悪いことをした後の少年のように書斎に呼びつけられた。ジョージ・ヨークがフィンチの説明を聞いた時、彼は立ち上がり、ズボンを脚にぴったりとさせて、彼のX字脚を顕にした。「私を見てみなさい、フィンチ。もしあの子がこんなふうになったら、それは君の責任だ」と命令口調で言うのだった。

しかしその添え木には別の代償を支払わなければならなかった。ハンスルはバーティーの泣き言に耳を貸す必要はなかったが、彼の勉強が不良になっていくのを見る心配をせねばならなかった。バーティーは勉強部屋において決して最高の状態ではなかった。授業中に間違いを犯したり、要点が理解できなかったりすると、自信を失い、不必要に興奮したりするのだった。彼は決して愚かな少年ではなかったが、感情を抑制することがなかなかできず、彼が胃腸に苦しんだのと同様に、兄に対する劣等感からひどく苦しんだのである。そしておそらくこの二つは関係があるのだろう。

「アルバート王子の早朝のお勉強は、添え木のためにほとんど無駄になっております」とハンスルは父親に報告した。「アルバート王子はほとんどすべての授業で添え木を付けておられました。そのような状況で授業ができませんのは明らかでございます」

フランシス・レイキング卿は今までの結果に満足して、バーティーを不憫に思い、添え木の着用を夜寝る時だけにとどめた。

添え木をつけたこの年は、後に分かることだが、バーティーにとってもう一つの苦難があった。ハンスルは当時の考え方に従い、左利きの少年も右手で字を書かなければならないとした。このことから、ぎごちない様子で母親に手紙を書いていたのは、添え木をつけた無理な姿勢のためだけでなく、左手で字を書くことを憶えたばかりで、右利きに換えなければならないということもあったのである。

一九〇四年はまた吃りの年でもあった。それが添え木から来る緊張によるものか、彼の全体的に虚弱な体質によるものか、はたまた生まれつきの性向に反して、右手を使わねばならないことから起因しているのか、誰に分かるだろう。それは突然起こり、程度のひどいものであった。この吃りですぐに彼は一層孤独になり、自分がみんなと違っているし、またみんなよりも劣っているという重荷をさらに辛いものにした。

いかなる欠点にも我慢ができず、優しい言葉をほとんどかけることのない父親と、どうしても子供たちには生理的に臆病になってしまう母親、そしてバーティーをからかい、彼の話し方の真似

をして、いつまでも楽しんでいる兄と妹がいるヨーク邸の少々粗野な雰囲気は、七才の彼に堪え難いものであった。しかし彼が言いたいことをやっとのことで言おうとする時、フィンチは変わらぬ表情で彼の言葉を最後まで聞いていた。それにラーラもいたのである。

ラーラはすでに年長の子供たちの面倒はほとんど見なかった。一九〇二年十二月二十日、ヨーク家にもう一人男の子が生まれたのである。父の名にちなんでジョージと名付けられた子は、子供部屋のハリーと一緒になった。しかし彼女はまだ上の子供たちがどうしているか様子を見ていたのである。彼女の日記がこう記している。

一九〇四年十月十四日。今日バーティーが見えたので、こっちへ来るように呼びかけた。可哀相に彼はひどい吃りになって、ますます重荷を増やしてしまった。しかし彼はキルトをたくし上げて、「ひ、膝を見、見て、ラーラ」と誇らしげに言ったのである。私は手を叩いて、言った。「素敵よ、真っすぐだわ、バーティー」

ハンスルもこの少年の吃りにはまったく不寛容だったわけではないのだが、ただ彼の怒りを抑えるぐらいであった。バーティーの勉強について報告する度に、あの恐るべき書斎でしばしば彼の父親と面談しなければならなかった。ハンスルの無関心がその当時姉に宛てた手紙に表われている。

ヨーク邸
サンドリンガム
ノーフォーク州

一九〇四年十二月十五日
親愛なるグラディス

ここでは週四日楽しくキジ射ちができ、かなりの獲物があったと思います。天候は北東からの激しい雨で荒れ模様のままです。姉上も元気で、子供たちもすくすく育っていることでしょう。デヴィッド王子はずいぶん進歩されましたが、弟さまの方はどうしてよいかほとほと困っております。ユア先生とオズワルド教授は、フランス語とドイツ語の会話をまったく進めてはいないと言っています。今週皇太子にこのことを報告せねばなりません。もう一度あの方にお二人を私立上級小学校に入学させるよう、強くお勧めするつもりです。そこで他の少年たちと交わったり、教室や運動場での競い合いから良いところが得られるでしょう。しかし皇太子は以前、子

供たちにはあの方とまったく同じ教育を施すのだと言って譲りませんでした。「ドールトン教授のもとでの私の教育には何も不都合なところはなかった」とあの方はおっしゃるでしょう。

愛する弟より、
（署名）ヘンリー

フランス語とドイツ語の会話なんて！　バーティーにとっては母国語で話すことが十分難しいのである・・・。

バーティーの気質、病気、不運が彼の教育を難しいものにした。家族の他は、一緒に過ごしたり、話し相手になったり、お手本となる人々しかいない王室の家庭は、特殊で、たいへんな努力を要求されるところであり、優劣の差は、めったに体の調子がいいとは感じない、人並み以上の感受性を持つ少年に一層重くのしかかった。彼の伝記作者の一人がこう書いている。「それらを一身に背負って、彼は、精神を集中することができない、夢の中のような放心状態と、時には高揚した気分の横溢、時には激しい号泣と憂鬱という、興奮したような感情の爆発を繰り返すのだった」

バーティーの持つ二つの性格上の特質で、彼はこの非常に難しい幼年時代から救われた。それは彼の勇気と持ち前の善良さであった。ジョージとメイの子供たちの中で、バーティーが最も優しい性質に恵まれていた。恐らくこの異例な家庭でラーラだけがバーティーの美質を認める能力を持っていたのであろう。これとは対照的に魅力のある容姿が、より無気力で、落ち着きのない兄の性格を隠していた。

7

ジョージとメイの伝記作者は、彼らが子供たちに冷たく、よそよそしかったということを否定する傾向がある。もちろん彼らの意図したことは素晴らしいことなのだが・・・。ジョージは間もなくジョージ五世になるのだが、彼の性格は要約するのがいとも簡単である。純粋にヴィクトリア朝時代の人物で、想像力に欠け、考え方に柔軟性がなく、人が良くて、現代的な言い方をすれば、「あまりパッとした人」ではなかった。彼自身承知しないだろうが、彼は自分のまわりで起こっていることを理解してはいず、もし見たことがあるとするならばだが、バレエの動作と同様に幼い子供たちを理解してはいなかった。彼の意図した通りに、子供たちは彼を恐れた。彼が理性を失って、怒りをもよおしている時は特にそうである。

メイ・ヨークを理解するのはもっと難しい。気難しく、恥ずかしがりで、自分に自信がなく、芸術的観賞眼に恵まれ、そのことで彼女の家庭や庭をすべて明るくすることができたが、彼女を愛し、完全に信頼している夫と同様に感情を顕にしない人だった。

ヴィクトリア女王の長女フレデリック公女はメイについて、彼女は「子供たちに対して情熱的な慈しみは持っていないように思われたが、これは私には至極当然のことと感じられた。彼女にはとても冷たく、堅苦しいところがあり、態度はよそよそしかった。彼女に会う度に、こちらから話しの口火を切ってやらなければならないのである・・・」と記している。

ジョージとメイの善かれと思う意図にもかかわらず、またジョージの両親との対照で、彼らは良い親とは言えず、子供たちとの関係において、第二次世界大戦後にスポック博士によって観測されたように、その態度では月からの距離ほども隔たっていた。デヴィッドの伝記作者の一人が書いている。「ジョージ国王とメアリー王妃は子供たちとの関係をうまく処理できず、彼らが様々な理由から、気質的に人の親になることに向いていなかったことは間違いない」彼らが子供を嫌っていたというのではない、というのは彼らは他の人の子供とは自然に、屈託なく遊んだからである。彼らは親になるということの呼吸をのみ込むことができなかった。おそらく父親の方はこの不幸な真実に気づくことがなかったであろうが、悲しいことに母親はそのことを理解し、彼女の力不足を実感したことは確かである。

こういった状況で最も苦しんだのは、家族の中の最初の不幸な犠牲者であるバーティーではなく、デヴィッドであった。バーティーは、彼に対ししばしば非常に批判的であった父親を憎んだ。しかしデヴィッドに対し父親は次第に不信感をつのらせていた。その方がずっと始末が悪いのである。

彼らの祖父が生きている間、彼はジョージとメイの子供たちの生活に重要な、家長たる役割を果たし続けた。「子供時代の記憶が並ぶ中で、祖父の肖像が永遠の陽射しに包まれているように見える」とデヴィッドは記している。「彼は六十代で、人生の黄昏時にあったが、その時になって彼の人格が私に大きな意味を持ち始めたのである」彼はエドワード七世が治世した時期をこう思い出す。「彼の生命力、屈託のない生の喜びに対抗できる者はほとんどいなかった。勿論荘重な儀式に国王として臨んだ姿を憶えている一方で、彼が食事の出されているテーブルについてその場を支配したり、美しい御婦人がたに向かって優雅な振る舞いをしているところを思い出すのが私は最も好きである」

国事という責務が重くのしかかっていても、国王はつねに孫たちのために時間を割いて、それぞれを別け隔てなく愛し、バーティーの吃りも、メアリーの自己正当化癖も外見的には何の区別もなく受け入れた。ヨーク邸にいる時は、上の三人の子供たちにとって、車道の先の本邸から、来てみなさいという言づてをもらうことほど嬉しいことはなかった。そこでは本当に優しくて、甘い匂いのするアリックスと、葉巻とブランディーの香りがして、父親よりも柔らかく、生え揃った口髭のある国王にみんなは代わる代わる抱き締めてもらえる。それからはお喋りと、笑い

と、ゲームである。

君主の重荷は、皇太子のそれよりも限りなく大きなものであった。特に母親によって何年もの間国事（そして他のほとんどの事柄でも）から遠ざけられていた者にとっては。しかし国王と王妃がサンドリンガムにいる時（いつ到着しても、屋敷の主人と彼のたくさんの客人たちがキジや、ヤマシギや、他の獲物を射ちに出かけるので、間もなく銃声が聞こえるのだった）はいつも、子供たちの心ははずむのである。少なくとも一日に一度、しばしば二度、彼らは本邸に呼ばれ、ハンスルと他の家庭教師らはその日はもう授業はないということを知っていた。

過去を振り返ると、幼年時代とは自伝の各章のようにきれいに区切れがついている傾向がある。デヴィッドとバーティーにとって一九〇六年の初めの数週間は新しく、記念すべき章を開くことになった。彼らは初めて彼ら以外の世界をそれまでよりずっと知ったのである。限りない人の顔、手を振る群衆、国旗と吹き流しといったこれまで馴染んで来たものとは違う世界である。

一年か、二年前に一度、ハンスルは近くの村の少年たちを集めてサッカーの試合を企画した。しかしこれらの少年たちは二人の若い王子を畏れ多く思い、彼らを蹴ってしまうことを恐がったので、試合はどうしようもなく、滑稽でさえあって、失敗だった。その後王宮と国民の間の隔たりは一層広がったようであり、デヴィッドとバーティーは孤立感を感じないどころか、ますますつのらせていった。彼らの特殊性と、彼らが直面している運命についての証しが必要であるなら、その試合がそれを提供してくれたのであり、彼らは決してその試合を忘れることはなかった。

しかし突然、政治や国家的な問題についての論争の世界を、もはやノーフォーク州のサンドリンガムにあるヨーク邸の勉強部屋から排除することができなくなった。そして時を同じくしてデヴィッドはその勉強部屋から、サンドリンガムやマールボロ・ハウス、アバジェルディーやフロッグモアの塀の外にある人生の混沌としたもの、不愉快や喜びに向かって初めて歩み出る試みをしようとしていた。

こういったことに対する第一の理由は一九〇六年の総選挙であった。これはその結果において何年もの間重大で、長引くものとなり、年長の二人の王子にとって忘れ難いものとなった。

それは一九〇五年十一月の雨の月曜日に始まった。両親は六千マイル離れた「王室の宝石」インドの燃える太陽の下にいた。ハンスルは脇に新聞を挟み、口にパイプをくわえて、いつも通りぴったり九時に勉強部屋に入って来た。そして初めて授業科目として第一回目の社会情勢の授業を行なった。明らかに用意周到に彼は言葉を用意していた。

「今日英国では、どちらの政党が我々の国を治めるか決定する、非常に重要な選挙がせまっていて、国民たちはかなり落ち着きを失っております。お二人がまだ幼くていらした頃我々は早々と

ボーア戦争に負けてしまいましたが、それで国民の多くが軍隊の運営に不満を抱くようになりました。さらにまた最近は国民のある者たちが長引く貧富の差に不満を持つようになったのです。彼らはひどく貧しい者、重病人、失業者の多くが安心するよう、これまで以上に何かせねばならないと考えておるのです。

「こういったことについて個人的な意見を申し上げるのが私の仕事ではありません。しかしあなた方は我々の民主主義がどう行なわれているか理解するのに十分なお年となられました」

ハンスル氏は机の上にパイプを置いて、少年たちの机の方に向かいながら新聞をめくった。「さあこれを注意深くご覧なさい」それから彼は新聞を広げて、彼らに梯子を昇る姿勢をした、二大政党の二人の党首が描かれているページを見せたが、保守党の党首バルフォア氏も、自由党の党首キャンベル＝バナマン氏もあまり威厳があるようには見えなかった。

「指示してある通りに、この二つの梯子と二人の男を切りぬいて、とびらの後ろにピンで留めておきなさい。それぞれの選挙区の結果がわかった時、勝った政党の党首を梯子の一段上に動かします。先に一番上まで上がった方がバッキンガム宮殿に招かれ、次の政府を組織するよう要請されるのです」

彼はデヴィッドに向かって言った。「年上なのだから、あなたが先に選びなさい」（それはいつものことで、年長のデヴィッドは先なのである。）彼はより陽気そうな人物を選んだが、それはたまたまキャンベル＝バナマンとなり、一方バーティーは自動的に保守党のバルフォアを支持した。これは彼らが長じてからの政治的偏見を偶然にも予言している。

最初の結果が報道された時、デヴィッドはキャンベル＝バナマンという形ですぐに先行した。避けられないといういやな気持ちでバーティーは、その差が広がっていくのを日々見つめていたが、自由党の圧倒的勝利はバルフォア氏を梯子の中ほどまでしか上げることがなかった。常に二番目なのである！　時々彼はお兄さんを蹴飛ばしたい気持ちになり、時々本当にそうしたのであった。

ハンスルは最終的な結果を眺めて、バーティーを元気づけようとした。キャンベル＝バナマン氏はピンの穴だらけになって梯子の天辺から見下ろしている。勝ったデヴィッドはこのように書き記した。「彼（ハンスル）が勉強部屋のとびらから汚い、破れた紙を取りはずした時、彼は達観したように言った。ある人々は間違いなくこの結果をひどいものと思うだろうが、私はイギリス国民の良識が結局ロイド・ジョージ氏のような過激論者の野蛮な政治に打ち勝つであろうことを確信している」

バーティーはそのことについてはあまりはっきりしていなかった。彼は極端に急進的なウェールズ人のロイド・ジョージに対するたくさんの敵意ある発言をうわさに聞いていた。しかし一層悪いのは、「彼の階級に対する変節者、裏切り者」であるウィンストン・チャーチルであり、彼は自由党と結託するために、下院の

発言権を封じたのである。

バーティー擁するところのバルフォア氏の敗北は翌月の海軍の大きな儀式によってある程度埋め合わされた。バーティーの見るところ、英国海軍は善と力と愛国精神であり、政党政治のつまらない喧嘩とは無縁のものである。海軍に変節者や裏切り者はいなかった。ハンスルもフィンチも少年たちにポーツマスで建設中の、世界で最も大規模な戦艦の話しをしていた。他のどれと比べても二倍以上の大砲を搭載し、世界で最も俊足である。デヴィッドもバーティーも海軍に熱中していたのは好都合であった。なぜなら時流の避け難さから、彼らは二人とも父や死んだ伯父や、死ぬ前に元帥になったアルフレッド大伯父さんと同じく海軍に入ることになっていたからである。そしてドレッドノートの進水と完成の年、最初に潮風の一吹きが勉強部屋に入って来たことはふさわしいことであった。

デヴィッドとバーティーは、両親がインドから帰って来ることを恐れていると互いに打ち明け合った。理由の一つは、勉強部屋の規則が締め付けられることが避け難いことであるからだ。ハンスル氏は、お父様が特に数学について詳しく尋ねるであろうことを彼らに警告していた。「海軍の試験に合格するためには、数学と代数と幾何学が良くないといけません」不幸にもハンスル氏はもともと数学の教師ではなかったのであり、また両親の留守の間にその勉強時間がかなり不足してしまった。つまりいつもの理由として、あまりに多くの時間が本邸で費やされたからである。そして可哀相なハンスル氏はその問題について国王に諫言する立場ではなかった。

8

ジョージとメイの帰宅はメアリーとハリーにとってはたいへん嬉しいことであった。バーティーにとってはかなり不安の材料でもある。ヨーク邸を出発する前に、ラーラは愛する少年にこの世で最上の思いやりから彼に警告の言葉を与えた。「お父様とお母様に最初にお会いになられる時、お二人がとても黒くなっていらっしゃることをわかっていなければなりません。ずいぶんと長い間熱帯にいらしたのですから」

このことでバーティーの心は不安に駆られた。「とても黒く」とラーラは言った。バーティーは一人になった時、勉強部屋の本棚でヘレン・バナマンの『ちびくろサンボ』を探した。ママとパパは本当にこんな風に見えるのだろうか。そしてバーティーがセーラー服の上下を着て、妹や兄弟たち、フィンチとハンスルとラーラ、二十人かそこらの近い親類と一緒にポーツマスのハード埠頭に立った時、彼は特に黙りこくっていた。しかしながら、その日は素晴らしい五月の一日で、大きな白い戦艦のレナウン号が見えて来るとバーティーの心は浮きたった。（戦艦レナウンはドレッドノートの次に彼が作る模型となるであろう。）そこに見え

ているすべての海兵隊員は制服を着て所定の場所につき、一行が眩しいチーク材の渡し板と真鍮色の将官艇に降りて行くと、砦の大砲が礼砲を鳴らした。十分後彼らは停止した戦艦に横づけされたのだが、彼らが下船して、梯子を昇ろうとすると、将官艇はほとんど戦艦の舷門にぶつかりそうになった。

バーティーは不安で気分が悪くなった。その時彼は、母が長く、白い毛皮で縁取りされたコートに、つば広の帽子とヴェールを被り、父の横に立っているのを見た。彼の父は少し日に焼けただけのように見えたが、母はコートと帽子のように白かった。ラーラは何を意味したのであろう。勿論抱き合ったりすることはなかった。バーティーもそれを期待してはいず、初めに母の手袋をした手を、それから父の手をとった時、軽くお辞儀をした。「おや、大きくなったね」「元気なの、ハリー?」「みんなにまた会えて何て素晴らしい日なんでしょう」「おじい様とおばあ様はお元気?」

挨拶もそこそこに父親がデヴィッドとバーティーを脇に連れて行き、厳しい声で言った。「勉強はどうなんだね。ハンスルがお前たちの成績を標準に達するようにしてくれて、お前たちも熱心にしているといいのだが」彼らは磨かれた白いデッキを歩いて行ったが、両側には下士官が気をつけの姿勢で立っていた。エンジンの回転が速くなると、バーティーは軽い振動を感じ、戦艦は長い航海の最後の二マイルに向けてスピードを上げていった。婦人たちは少し離れた所で話しをしていたが、船に逆らう微風で飛ばされないように帽子を押さえていた。

「デヴィッド、お前がオズボーン海軍兵学校に入るまであと一年しかないね」と父は情け容赦なく続けた。「わかっているように、数学は英国海軍で最も重要な科目だ。ラテン語やギリシャ語やああいった馬鹿げた死語はちっとも気にかけてはいない。それでロンドンまでの汽車の中でお前たちに渡そうと思うのだが、いくつか記述式の問題を作っておいた。二人に今週の末までにそれを解いておいてほしいのだ。わかるね?」

「はい、お父さん」

「はい、お父さん」

ハリーは最近勉強部屋の兄たちに加わったのだが、まだ六才なので、家族再会後の父親による厳しい質問や試験にさらされてはいなかった。一九〇六年のこの時は・・・。「小さなハリー」は後に家族の中で一番背が高くなるのだけれども、普通より小さかった。彼に二人の弟ができた事実は、母親の意図と悲しく食い違っていた。ハリーの誕生日から十一日後の一九〇〇年四月十一日、メイは伯母のオーガスタに宛てて書いている。「私は自分自身の義務を行ないました、そしてこれで終わりにしようかと思います。というのは子供を生むということは私にはひどく疎ましいことだからです。一度生まれてしまえばみんなとても可愛いのですけれども。子供たちは赤ん坊にとても喜んでいまして、彼が私

の窓に飛び込んで来て、羽を切り落とさなければならなかったと思っているのです」

翌月一九〇〇年五月十七日、老女王は再びジョージとメイの最も若い子供の名付け親となり、日記に「本当に可愛い男の子」と記した。彼女はまた彼の幾分運命を背負った名前ヘンリー・ウィリアム・フレデリック・アルバートについて書いている。彼女の最近亡くなった義理の息子のバッテンバーグ公ヘンリーにちなむヘンリー、十四年の間ヨーロッパを戦火にさらした、彼女の孫であるドイツ皇帝のウィリアム（ヴィルヘルム）、最近での戦争で英雄となった陸軍元帥のロバーツ卿にちなむフレデリック、そして彼女の亡き夫で、その名前は暗澹たる悲劇と同義語であるアルバート。

しかしながらハリーはこういった惨めさに屈伏していないように見え、「元気のいい、快活な」明るい少年に育った、と伝記作者は書いている。だがバーティーのように彼も「深刻な精神的緊張の兆候を示したのであった」また幼児期には時々危険な健康状態に陥り、思春期まで標準以下の体格だった。しかしバーティーと違って、幼年時代には必要な栄養と心配りと世話のすべてが与えられていた。

ハリーは以前のバーティーのように、まだ子供部屋の問題を取り仕切っていたラーラの特別な関心を惹いた。しかしラーラはまたハリーに対する父親の説明しがたいほどの関心に気がついた。それは年上の少年たちの幸福には無関心に思われるのとは対照的であった。両親が二度目の長い旅行に出発して間もなく、ラーラは日記に記した。

一九〇五年十月十二日

陛下が幼いハリーの健康に対してたいへんな関心を示されるのを見るのはとても嬉しいことである。陛下はたびたび子供部屋にやって来ては、彼がどんな具合か、そして私が彼に適切な食事を与えているかどうかお尋ねになる。このような質問に対して他の人は腹を立てるかもしれないが、私は同じような状況でもそんなことはない。なぜなら青白い顔のハリーに私がしようとする世話に対し、陛下の援助や関心を受けられるのはとても心強いからである。陛下がバーティーの恐ろしい幼児期において彼の世話に同じ関心をお示しなっていたならば。しかし遅くなってもまったくないよりは良いのだ。

その後も、またインドへの旅行から帰ってしばらくの間、ジョージ・ヨークが三番目の息子の幸福と健康を引き続き心配している証拠がある。ハンスルがノーフォークのたいへん寒い天候にもかかわらずハリーを連れ出し、彼が風邪をひきそうになったことを知って、ジョージはハンスルに手紙を書いた。（一九〇九年二月五日付）「彼は体がかなり弱く、逞しい二人の兄とは違う

ように接してやらなければならないことを憶えておいてもらわなければこまるのだが」

こういったことのすべてはジョージの海軍での成長と経験が影響していて、厳しく、曲げられない規律が若い水兵の訓練に適応されなければならず、同様に不遇の人、体の不自由な人に対する深い関心を身につける必要があるということを彼は学んだのである。

デヴィッドはほとんど六ヶ月間ハリーと離れて暮らし、彼とはあまり会っていなかった。後に彼は書いている。「彼のことは好きだったが、あの時期は自然にバーティーと仲良くしていた。何か荒っぽいゲームがあると、ハリーは当然のごとく近寄らなかった。彼がしばしば病気になっていたことはうすうす知っていたが、バーティーもその当時はそうだった。メアリーと私は元気であったが、そのことをバーティーはあまり気にかけてはいなかった。バーティーがハリーよりも勇敢であるというのではない。二人のどちらも恐ろしさの意味を知らなかったと私は思う。ただハリーは彼の病弱さの故に甘やかされるのに慣れていたのである。そして誰もバーティーを甘やかしたりしなかった」

ハリーの父親は英国海軍の訓練を耐え抜くにはどれぐらいのスタミナが必要か十分にわかっていた。風邪のひどい消耗で彼の片方の肺が悪くなり、ジョージ・ヨークは、三番目の息子を海軍の訓練という苦役に向かわせることがあってはならないと決意した。メイはどの子供たちの運命についてもほとんど、もしくはまったく発言することがなかった。ハンスルから彼の姉に宛てての一通の手紙にハリーの将来における国王の決定と、それに対する彼自身の考えが記されている。

マールボロ・ハウス
ロンドン南西地区

一九一〇年四月十八日

親愛なるグラディス

この前の手紙でハリー王子がブロードステアズにある、我々の敬愛する国王のお命をお助けになったフランシス・レイキング卿の別荘において、インフルエンザの病後療養をされていると書いたのを憶えているでしょう。王子はシスター・イーディス・ウォードに看病されていますが、王子はあまりお行儀が良いわけではなく、学校の規律が必要であるとご自分でおっしゃっている。

私立上級小学校が王子様たちに与える良い影響を、いかに熱心に私が陛下にお分かりいただけるよう努めてきたか知っていますね。デヴィッド王子とアルバート王子の場合はうまくいきませんでしたが、あまり丈夫でないハリー様にはそれが最善の方法であると陛下に納得していただくのに、今までの

努力が役に立ったのかもしれません。
フランシス・レイキング卿はもちろん上級小学校の方が荒々しい海軍の訓練よりも好ましいとお考えです。というのでハリー王子はブロードステアズのセイント・ピーターズ・コート・スクールに入学することになりました。そこの校長は私の旧い友人のアラン・リチャード氏です。素晴らしいじゃありませんか。これで私はジョージ王子とジョン王子にすべての時間を割くことができます。とはいえジョン王子にはほとんどなす術がないのですが。

愛情を込めて弟より
（署名）ヘンリー

9

ジョージとジョンの王子たちは父ジョージとメイの「計算違い」である二人だった。彼らはメイがもう子供は生まないと言い、ジョージが「家族ではなく、軍隊を育てる」と宣言したかなり後に生まれた。若い方のジョン王子は一九〇五年七月十二日に生まれたが、それは両親がインドとビルマへの旅行に発つ三ヵ月前であった。早朝の新聞の写真はクッションに横たわる立派で、つやかな乳児を映していた。そしてラーラは特に彼を誇りに思い、子供たちの中で最も美しいと公言した。

両親が東洋からもどるまでに、ジョンは不安をもたらすような異常の兆候を示していた。彼はとても魅力のある男の子であったが、彼の遺伝子のどこかにハノーヴァー家特有の精神的不安定が隠されていた。これは今までにも程度の差はあれ、ヴィクトリア女王とアルバート公の子供たちや孫たちに現われ、特にアルバート・ヴィクター公には顕著であった。その気味がバーティーとハリーにも見られ、嗚咽やヒステリックな笑いを伴う、癇癪や絶望の爆発となっていた。成人してこれらの子供たちは極端になる場合を抑制することができるようになったが、父親のようにすぐに腹をたてる傾向がいつもあった。
バーティーの公認伝記作者であるジョン・ウィーラー＝ベネットは、いかに容易く彼が挫折し、「自分の弱点や過失をあまりに重大に考えがちであった」と書いているが、それが深い絶望や怒りの爆発となって現われたのである。最も簡単な数学を習得できないことで彼は絶望に囚われるようになった。「いくつもの問題が、それを解こうとする彼の努力を無駄にした時、彼は結局くやし涙にくれるのであった」数年後「心身ともに彼を疲労困憊させた癇癪」についても言及されている。
ジョン王子は美しい少年に育ち、癲癇が原因となっている精神的欠陥によって、兄や姉を含む彼のまわりの人々から彼は一層愛され、大事にされた。ハンスルは勉強部屋ではこの少年に対して彼のできることはしたのだが、ついに彼がまったく兄について行

けないことがわかった。その上彼の遠い先祖であるジョン王のように、彼は癲癇を患い、成長するにつれてその発作はますます注意を要するものになった。

対照的にジョージ王子は両親にとって子供たちの中で最も手がかからなかった。デヴィッドのように容姿がすぐれていて、バーティーやハリーよりも賢く、丈夫であり、少年が普通に望み得るような成功を初めからほとんど完璧に手に入れていた。怠け癖が彼の唯一の欠点であったが、彼は思慮深く、この弱点に気がついて、必要があれば自力で向上していった。

デヴィッドはジョージとの生涯にわたる友情がすでに確かなものになっていたこの時期について記している。「私は彼の人格の中に私に近い性質を見出した。我々は同じことに対し笑ったものだ。その冬我々は兄弟以上の仲、つまり親しい友人となった」

メアリーはというと、一九〇七年四月二十五日の十回目の誕生日の頃について、彼女が後年記した記録や父親の日誌、同時代の人々の手紙、日記、回想録に彼女の姿が時折見られる。近親の一族以外の大人たちの中では人見知りをしていたが、彼女は明らかにまだお転婆娘であり、それを得意がっていた。彼女の目や力を試すあらゆる活動を愛し、すでにテニスはかなりの腕前で、水泳は卓越していた。

とりわけメアリーは乗馬が好きであり、「彼女の野外での主たる楽しみ」となっていた。六才の時にベンというロバを与えられ、彼をたいへん可愛がった。モリーがそれに続き、他が加わった。父親は彼女が一流の女性騎手になるであろうと気づいた。兄たちよりも乗馬が上手で、彼らも即座にそれに同意した。「彼女は馬を愛し、バーティーや私より乗馬がうまかった。彼女の金髪に我々の尊敬を集めるその大胆さが隠れていた」

デヴィッドとジョージの間に特別な絆が築かれる前のしばらくの間、自称「三銃士」の彼らはたいへん親密な友情を結んだ。「田舎、特にサンドリンガムではメアリー、バーティー、そして私は何かすることに迷うということはなかった。最も楽しかったのは三人が我々自身のやりたいように任された時である。メアリーは多くの遊びに一緒に参加していた。彼女は時々まったくのお転婆になることもあったが、しかしその時以外は彼女の手ごわい『家庭教師』に助けられて、我々の生活を優しく支配するのであった」とデヴィッドは回想している。

十才の時、メアリーは彼女の赤みがかった金髪を肩まで伸ばした。「最後を飾る栄光」という決まり文句ほど真実であることはなかった。というのは幼児期の可愛らしさは長続きせず、彼女の顔は（ある同時代人が記しているが）「愛想がよく、人好きがした」のだけれども、兄弟より美しくなくなった。ある新聞が彼女について言うには、「彼女は不器量な顔と暖かい心を持った女性である」ということだった。

（間もなく首相になる）ハーバート・アスクィスはこの時期のメアリーについて書いている。「彼女は不安そうな喜びと、父親に対して尊敬の念があるという印象を人に与え、とても恥ずかしがりで、女の子らしい魅力を持っている」まさしく彼女は父親を尊敬していた。しかしメアリーはデヴィッドやバーティーがそうであったように、彼を日毎恐れていた訳ではない。彼らの父親は女子は男子と同じような厳しい管理の必要はないと信じていて、その上一人娘を溺愛し、彼女と一緒にいることが好きだった。メアリーに実際欠けていたのは彼女と同年代の女の子と遊ぶことであった。何日も、時には何週間も彼女は女の子にまったく会わずにいることがあり、彼女が会う女性たちは家庭教師と使用人の中の女性たちだけであった。彼女は恐らく彼女についている小間使いのエルザと最も仲がよく、彼女には一番の秘密にしている考えを打ち明けていた。

何年も後に、エルザはこう言ったとされている。「他に誰もいない時には私たちは姉妹のように話し合いました。彼女はすべてを話してくれました。彼女の好きな人、嫌いな人、その理由、ご兄弟についてなんでも、またご両親についてさえも。ご両親をいかに愛していらっしゃるか、デヴィッド王子やアルバート王子が彼女ほどご両親を愛していないようなのをいかに残念に思っていらっしゃるか。実際王子様たちはご両親をまったく愛していらっしゃらないようでした。尋ねられれば、十六才になるということがどういうことなのか、体にどんなことが起こるのかといったことを私は彼女に話していました。しかし階下で起こっていることや、他の使用人については何もお尋ねにはなりませんでした」

成人して結婚した後、メアリーはエルザのことをいとおしく語っている。「彼女は並み外れた知性を持ち、感受性が鋭く、本当に慎重な女性でしたので、私の最も大切な考えを言えると感じたのでした。彼女がいることはたいへんな安心でした。ブリカ嬢やドゥソー嬢に決して言えないことも彼女には話すことができたのです」

メアリーの伝記作者の一人は彼女の以外な才能に注目している。「メアリーは成長するにつれ、母親にそっくりになり、彼女のかなり低い声を受け継いでいた。デイム・ネリー・メルバは、王家の血筋という障害がなければ、王女様がメゾ・ソプラノのコンサート歌手になったかもしれないと考えた。デヴィッドとバーティーはこのことについて違った見解を持っていた。フロッグモアでメアリーがハッチンソンという人から歌のレッスンを受けている時、二人は音楽室の窓の下に隠れて、『真夜中の雄猫のセレナーデ』をなかなか上手に真似していたのだった」

学校に寄宿させた方がよいという意見が両親に出されたにもかかわらず、メアリーは家庭だけで教育を受けていた。ハリーがセイント・ピーターズ・コートに行かされる三年前、子供たちの中

で最初に外の世界と対面したのはデヴィッドである。父親からデヴィッドとバーティーに課された数学のテストの結果は少年たちがまさしく恐れていたものであった。「問題の一つは、父がその前の猟のシーズンにバルモラルで殺した雄鹿の平均体重だった。それらは彼の収穫手帳に細かく記録されていて、デヴィッドと私は、ポンド、ストーン、ハンドレッドウエイトで記録されたかなりの数になるその頭数を調べ、それらを合計し、全体の数で割らなければならなかった」とバーティーは回想する。

デヴィッドは彼の回想録でこの些細な悪夢を思い出して、「その問題は見かけよりも複雑であった。しかし父は十才以上なら誰でもそんな簡単な問題は解けるはずであると主張した。ところが勉強部屋に帰るとすぐに、バーティーと私は頭を悩ますほどの難しい宿題をもらったのだとわかった」と書いている。

少年たちはまったく答えが解らず、この不出来に対する父親の答えは数学の特別な教師として、トンブリッジ・スクールのマーチン・S・デヴィッド氏を雇うことであった。この人はハンスルときわめてうまが合った。彼は計算の基礎から始め、海軍の試験に合格するほど高い水準ではないが、まもなく少年たちを一定のレベルまで引き上げた。

年嵩の少年たちの教育に対する未来のジョージ五世の態度には二つの説明できない謎がある。第一にどうして彼はもっと以前に、単に数学においてだけではなくハンスルに教師としての力量が不足していることがわからなかったのかということである。デヴィッドはこう答えている。「ハンスル氏に批判的にはなりたくないが、彼に教えられた、不思議にも成果の上がらなかった五年間を振り返ると、実際にほとんど何も学んでいなかったことに気がついて驚く。私は十二年以上もの間彼の指導を受ける機会があったが、彼が言ったことで才気に富んだことや、創造的であった言葉は今日思い出すことができない」

二つ目の謎はどうして彼は、彼自身が受けたような水兵のための教育を二人が受けるという決定にそれほど固執したのかということである。なぜなら彼が皇太子になった時、それだけでは将来の君主にとってどうしようもないくらい不十分であることが解り始めたのであるから。

彼の公認伝記作者はこう書いている。

> 彼の水兵になるための教育は、新しい責任の大半には適当ではなかったということが彼には十分わかっていた。彼が英国史と法制史の知識の欠如を補い、平均的なパブリック・スクールの学生が卒業時に到達する一般的教育水準に自ら到達しようと努力したのは、あっと言う間に過ぎ去った父王の治世の九年間だけであった。彼が王位についた時、この欠如は補われていず、その水準にも達していなかった。彼の治世が半分を過ぎた頃も未だ自分の教育に几帳面に精進していたの

である。

このことから、息子たちの知識の貧困さに気がつき、遅ればせながら自分自身のそれをも直していこうとする時、彼が無益にも航海した海軍教育という同じ狭い海に、彼らを進水させたことは説明がつかないように思われる。にもかかわらず、彼は偏屈な意見に固執した。「兄と私はまったく私立上級小学校に行かなかった。海軍がデヴィッドに必要なことすべてを教えてくれるだろう」

幸運にも彼らの新しい先生は明敏であり、デヴィッドの頭に十分な数学の知識を導入して、彼は（わずかながら彼の地位に助けられて?）予備試験に見事合格した。その結果父親は喜び勇んで日記にこう書き記した。（一九〇七年二月十八日付）「デヴィッドは委員会の前に進み出て、海軍本部が彼に海軍への推薦を与えるべきかどうかの面接を受けた。彼は非常にうまくやってのけたと言えよう。彼らが面接した中で最も優秀な少年だと彼らは言ってくれたが、とても満足なことである」

では、真鍮のボタンと士官候補生の白いえり飾りのある、青い筒形の上着と海軍帽を身につけ、父と共にある五月の晴れた日、マールボロ・ハウスの外で黒い王室のダイムラーに乗り込むこの十三才の少年を思い描いてみよう。彼は、その制服にいささか感銘を受けたバーティーと、彼を腕の中に抱き、成功と幸福を祈る母親に別れを告げた。ダイムラーはモールに入って行き、ウォータールー駅に向かった。その間車の暗い隅でこの士官候補生は、恥ずかしくつらいことではあるが、急に泣き出してしまった。

デヴィッドはこう回想している。「汽車の中で父は彼の昔の海軍時代の話しをして、私を宥めてくれた。スピットヘッドからカウズまでは話し通しだったので、父は黙ってしまった。それから海軍本部の船がドックに入る直前に言った。『デヴィッド、家を出て、世界へと旅立つけれど、いつも私がお前の一番の友人であることを忘れないように』」

父親にはこの同じ時に、同行する家庭教師と兄がいたが、デヴィッドにはそのような者はいなかった。彼は一人きりであり、「甘やかされた王室の人間」であった。小さく、可愛らしく、傷つきやすかった。海軍でかなり昇進したある同時代の一人が、皇太子に付き添われてデヴィッドがやって来たことを憶えている。

「我々が休暇からもどった時、新入生がすでに到着していた。彼らは『船酔いに慣れるために』常に二日先に始めるのである。といっても海は遠くにある灰青色のしぶきにすぎないのだが。この新入生が誰であるかわかるやいなや、我々上級生は彼がつらい思いをしていると確信した。

「今振り返ってみると、我々は猟犬の群れにすぎなかったことがわかる。しかし新入生に彼らの立場をわからせるため、惨めな

思いをさせるのは長い間の伝統であった。同時にオズボーンを紛争状態のように思わせる規律のもとで、彼らが後に居場所とする下級将校室に入る心構えをさせてやるのである」

オズボーン海軍兵学校は、亡き女王の死後ほおっておかれた、どっしりした屋敷とそのまわりに急いで建てられた、いくつかのみすぼらしい建物との集合であった。宿泊施設と講義室はともに冷え冷えして、質素であり、メイン・ホールのまわりに設けてあった。ホールは『ネルソン』と呼ばれ、『海軍にできないことは何もない』というモットーを、中央の樫の大梁に大きな真鍮の文字で掲げていた。

デヴィッドに最初に降りかかった事件は、彼の金髪を染めなければならないということであった。「私は先輩たちに詰め寄られ、気をつけの状態で立たされている間にその一人が赤インクの瓶を私の頭にこぼしたのである。インクは首へと滴り落ち、私の持っていた数少ない白いワイシャツの一枚を駄目にしてしまった。それからすぐにラッパが宿舎に鳴って、六期生は隊列に並ぶためあわてて駆け出した」『態度不謹慎』という悲惨な始末書を読んで、デヴィッドは言い訳もせずその結末を全面的に受け入れた。

厳しくなっていく生活は耐え難いものであったが、デヴィッドが、自分に何が起こるかまったくわからずにその苦役によく耐えているのは立派なことであった。後年の友人がこう記している。

「この時期の彼を注意して見ていたが、彼の以前の生活との違いがどんなものであったにちがいないか想像できさえすれば、彼がこうむっている辛さがわかるのだった」

デヴィッド自身この時期のことについて率直な表現で書いている。

> 初めは特に辛く思われた、というのはこれまで学校に通った経験がないので、少年たちとの不慣れな共同生活において、その恐ろしく、微妙な人間関係にとらわれてしまったのだ。以前はフィンチに洋服の面倒を見てもらい、片付けもしてもらった。今は自分自身で探さねばならない。そしてあの屋敷の心地よい部屋から、三〇人ばかりの少年たちのいる細長く、がらんとした寮に投げ込まれてしまったのである。私の生活範囲は堅い鉄のベッドと、洋服と書類整理箱と個人用の貴重品の引き出しの三つにしきられた、白と黒の整理ダンスとの間の往復だけになった。

未来の提督の一人は、その時期に彼の感受性や肉体上の忍耐力が限界となり、彼自身の心が狭量になっていたことがわかっていながら、疑問を抱く本能をおさえつけていたのであった。彼は一九〇七年のこの頃のことを以下のように回想している。

> 我々は何をするにも二通りしかないことを教えられた。常に

正しいところの海軍のやり方と常に間違っている非海軍的やり方である。どんな逸脱も許されなかった。ちょうど先輩たちが思考しないよう厳しく訓練されたように、我々は決まった型にはめられようとしていたが、その彼らは代わる代わる蒸気エンジン、高性能爆弾、後装銃、魚雷、そして勿論潜水艦の導入をも非難したのである。

すべての実験作業はけなされ、可哀相なトライオン提督は十四年前に機動演習で気紛な戦術を行なって衝突し、彼の旗鑑と生命を失ったのだが、自分自身の危険な実験の犠牲者として言及されていた。部下にイニシアチブをとらせるとはまったく！

数学、科学、航海術、工学がすべてであった。ラテン語も、論理学も、（我々は世界中を航海することになっていたが）地理も、歴史も、海軍史さえなかった。

そしてその時期は英国海軍が、偉大な近代的提督である「ジャッキー」・フィッシャーの手堅く、着実な指揮の下、今までのうちで最も大掛りな改革を経ることになっていたのである。

二学期の終わりに忠実なフィンチはポーツマスのハード埠頭に立っていた。デヴィッドはフェリーから彼がちらりと見えると手を振った。即座に彼の後ろにいた士官候補生たちの教官が厳しく叱責する。「兵学校の学生は手など振りません。紳士もまた然りです。品がありませんぞ」フィンチは手を振り返さなかった。「品がない」と思われたくなかったのではなく、外輪船のへさきに群がっている制服を着込んだ学生たちが誰が誰だか区別がまったくつかなかったからである。

しかし歓喜と興奮はわずかに遅れただけであった。先ほどの教官のことも、三週間後にオズボーンの牢獄に帰ることも、朝の空が暗い灰色で東からのみぞれが港に吹きつけることも気にかけまい。デヴィッドはフィンチの横にいたが、彼は、デヴィッドが思い出せる限りにおいて安全と優しさと理解を表わしていた。フィンチはデヴィッドの家族からもらった丈が長く、美しくカットされたツイードのコートを着ていたが、それはかつて不幸なクラレンス公の所有であったと伝えられているものであった。

握手は形式にのっとっていた。男と少年の眼は語るべきすべてのことを語っていた。そして彼らは駅に向かって歩いたが、フィンチの背の高さが五フィート三インチ[5]のデヴィッドを一層小さく見せていた。挨拶の言葉の他は何も言わずに、フィンチは、特権と安逸へともどって来た印となる、彼らのためだけに予約してある一等のコンパートメントへデヴィッドを案内した。

みぞれが窓を打ちつけるなか、汽車は時間通り発車し、大きな海軍町を走って行った。舗道には水兵があふれていて、何人かは脇に女性を連れていた。煙が工場の煙突や数多くの吹き出し口か

ら水平に流れている。路面電車は濡れた道路と馬車の間を、ドーヴァー海峡を通る貨物船のようにくぐり抜けて行った。

「あなたが何を一番期待しておいでかわかっています、デヴィッド様」

「それは何だい、フィンチ。ご馳走かい?」

彼らは共に笑った。これがまさしくあるべき姿なのだ、そしてデヴィッドはそうなることを夢見ていた。コンパートメントのスチーム暖房は全開になっていて、デヴィッドは青いレインコートを脱ぎ捨てた。フィンチはそれを慣れた手つきで彼から受け取り、たたんで、上の網だなに置いた。

「今日の夕食には何が出るんだい?」

フィンチはわからなかったが、すぐにメニューに目を通し、指で一つ一つ料理を読み上げていった。どれもデヴィッドの好物とわかっているものばかりである。「濃い魚のスープ、濃い味付けのグレービーをかけたヤマシギのロースト・・・、あなたのために箱一杯のチョコレートがあります」で終わりとなった。

デヴィッドは笑って、舌舐めずりした。「あのね、フィンチ、食事は時々とてもひどくて、病気の時は食べられないこともあるんだ。ある日空腹でほとんど気を失いそうになって、午後ずっとラグビーをしていたら、傷に包帯をしてもらった時船内の病室で本当に素晴らしい食事にありつけたことを思い出したんだ。それでひどい病気のふりをして、寮母のところに行ったんだけど、彼女はすぐに僕の咳が嘘であることを見抜き、僕のことを『仮病使い』と呼んだんだ」

「それで彼女はあなたをたたき出したんですね、当然でしょう」しかしフィンチは微笑んでいた。

「そうしようとしたんだけど、僕はワーワー泣き始めたのさ。やりすぎたかな? そしてこんなことを言ったと思う。『僕が欲しいのはおいしい食事だけです・・・』それでね、フィンチ、彼女は気前良く僕にバター・エッグを作ってくれて、おまけに新しいジャム付きパンまでご馳走になったんだ」

フィンチは立ち上がって、窓から外を見た。汽車はサセックス州を全速力で走り、みぞれは雪に変わっていて、それが耕した畝の窪みにすでに積もっていた。「食事についてのこういった話しでお腹がすきましたね。昼食をお願いしてもよろしいですか?」彼は笑って言い出した。「食堂車のメニューにヤマシギがあるかどうか誰か知っているだろうか」

10

フィンチとデヴィッドは夜の帳がサンドリンガムの邸宅に降りる頃になってやっとウォルファトンに到着した。ひどく雪が降っており、フィンチとデヴィッドが現われて、ベンが馬を止める以前に駅前の馬車の轍を雪がおおっていた。「お帰りなさい、お坊っちゃま。お疲れ様です、フィンチさん」それからまたデ

ヴィッドに向かって、「ホワイト・クリスマスを迎えることになりそうですね」と言った。

「そうだといいね。ベン、明日一番にトボガンぞりを用意してくれないかい」

ヨーク邸のホールに足を踏み入れた時、デヴィッドは、ひどい扱いを受けた、二学期を迎える兵学校の学生ではなく、戦いから帰って来たばかりの海軍の英雄のような気がした。見慣れた微笑む顔、おしゃべりや笑い声。彼は泣き出したい気持ちになったが、なんとか自分を抑え、フィンチが諭したように「立派な大人として振る舞う」ことができた。メアリー、ハリー、（あまり具合が良くない様子の）バーティー、（明日で五才になり、最も大声で叫んでいる）ジョージ、ラーラの腕に抱かれてじっとしている幼い二才半のジョンたちがいる。ラーラ自身はぽっちゃりした可愛い顔をして、終始微笑んでいた。そして母は白いスパンコールの縁取りがしてある、長い、空色のシルクのドレスを着て、長男に挨拶をするため前に進み出た。頬と頬が少し触れただけであり、それは冷たかったが、彼女の表情と声は暖かだった。「お帰りなさい、デヴィッド。そしてメリー・クリスマス」

そして最後に父が口にパイプをくわえ、脇に新聞を挟んで、書斎から現われた。「おや、放蕩息子が自分の港にご帰還だ！」彼の家族に対する挨拶は常にふざけているように聞こえた。デヴィッドは父と握手して、ロンドンを通過しての汽車による帰途について決まり切った質問に答えた後、通知表の提出という恐るべき仕事を実行した。デヴィッドは後に備忘録に書き残している。「愛情溢れる帰宅の挨拶が終わるやいなや、私は父に不吉な封筒を手渡したが、父はその中身には直接の興味を示さず、何気なくポケットにしまったのである」

まず最初に、それほど悪い通知表ではなかろうとデヴィッドは計算していた。実際彼はかなり良くやったと思っていたのである。次に、もし書斎に呼ばれることになるのであれば、それは夕食の後であろう。夕食が始まり、終わった。メアリーは特に陽気で、静かにさせなければならなかった。バーティーは彼の特別に用意された食べやすい食事をとった後、元気になったが、それはデヴィッドには牛乳にパンを浮かせたもののように見えた。ハリーは夕食を共にするのを許されたのがこれが二度目で、恐縮し、黙って食事をした。女官のエアリー夫人が伯母さんについて長い、デヴィッドにはまったくつまらない話しをした。そして彼らはみんなチャーボネル・アンド・ウォーカーのチョコレートを一つだけ食べたのであった。それでも悪くはない。

呼び出しはまったく来なかった。フィンチがおやすみを言いに子供部屋に入って来た時、デヴィッドは彼に「ああ、良かった！」と告げた。フィンチも安心しているようであった。しかしデヴィッドは翌朝のことをこう書いている。

フィンチは渋い顔をして、書斎まで来るようにという身も氷るような知らせをもって来た。一分後あの赤い、布張りの部屋でつらい状況が起こっていた。父は私の目を覗き込んで言った。「デヴィッド、お前の通知表が良くないということを言わなければならないのは残念だ。読んでみなさい」それは、私の努力に対する評価とはまったく何の関係もない、厳しく、冷酷な報告であった。悲しい事実だが、私に家庭教師をつけた時に悪霊となった数学が、そのあらゆる恐るべき方向からオズボーンまで私につきまとったのである。この危機に対する父の措置はオズボーンから先生を雇うことであった。そしてクリスマスのお祝いが終わり次第、私は勉強に釘付けとなり、学校についていけるよう休暇の大部分を失うはめになった。

一九〇九年一月、デヴィッドが湖でのスケートや、トボガンそり遊び、雪投げをせずに、「数学を猛勉強」して彼の休暇のほとんどを過ごしたあの不幸な時期から一年少々たった頃、バーティーは兄がオズボーンで一年生として味わった同じ苦難に直面した。バーティーも兵学校に行くことが決まっていることを知っていたので、デヴィッドは彼自身の苦しみの詳細な部分は所々彼に話さずにおいたが、バーティーは暗澹たる未来に向かい合っていることを十分承知していた。

一方彼の母親はバーティーが外界の苦労やつまづきに旅立つことに対してデヴィッドの時よりも気にかけていなかった。「私はバーティーに満足しています」と、メイはクリスマスと一九〇八年の正月の間のある晩にメアリー・コーク夫人に語った。彼女らはバッキンガム宮殿における翌日の公式昼食会のためにロンドンのマールボロ・ハウスに来ていた。「彼は立派にやってくれるでしょう」

女官は尋ねた。「どうしてそのようにおっしゃられるのですか。バーティー様は虚弱体質で、デヴィッド様より賢くはいらっしゃらないとよく言っておいでしたが」

メイは刺繍を脇においてコーヒーをそそいだ。「可哀相なバーティーは意志の弱さ、自信の無さ、癇癪、ひどい吃りに苦しんでいます。彼は与えられた時間の中でそれらを克服するでしょう。彼は欠点と真剣に取り組んで、戦う方法を心得ています」彼女は強調してさらに言った。「そのようには見えないけれど、バーティーは戦う子です。デヴィッドは安易な逃げ道を求めるでしょうけれど。バーティーが頑張って、数学ができるようになったのを見てごらんなさい・・・」

バーティーの数学のレベルは兄よりもずっと低かったし、デヴィッドの英雄的努力にもかかわらず、わずか六ヵ月前、最も寛大な試験委員会でさえバーティーを海軍には不合格にせざるを得なかったようである。バーティーの伝記作者の一人が一九〇八年

における彼の数学についてこのように述べている。「彼は基礎を習得することができないようであり、その複雑さは彼の理解をまったく越えていた。その上、彼はこの科目が大嫌いであり、一方大変に気にしていて、苦手なことを幾分恥じていた。問題を解こうとする彼の努力が次から次へと無駄になると、彼は絶望にとらわれ、ついに怒りの涙にくれるのである」

かつて父親は勉強に夢中になりすぎることで彼を叱らなければならなかった。「計算で間違いをした時に癇癪をおこすのを治さないとね。我々はみんな時々間違いをするんだ。そろそろ十二才なんだし、もう六才の子供のようにしていてはいけないよ」

ところが、彼の将来は不吉なもののように思われていたのだが、バーティーが初めて彼の個性を発揮し、彼のそばにいた者たちがその成長に気がついたのは彼が十二才の時なのである。ラーラが最初にその変化に気がついたのであった。つまるところ彼女が最も彼に近い訳である。

［一九〇八年四月二十日付の彼女の日記から］可哀相なバーティーは今朝ひどく不機嫌になった。デヴィッドが言うには、彼は急に泣き出して、机を蹴ったり、人生の苛酷さや、どんなにみんなを憎んでいて、何も理解できないことを喚きちらしていたという。午後になって彼は私のところに来て、お腹が痛くて病気になりそうだと訴えた。いつものピンクの錠剤を与えてから私たちは少しおしゃべりした。今はハリーと一緒に使っている勉強部屋の出来事を尋ねると、彼は再び急に泣き出した。しかし今度は怒りではなく、恥ずかしさからであった。「ラーラ、僕どうしたらいいんだろう？」私が答える前に彼は自分から答えを出した。大変成長した様子で、まったく吃ることもなくこう言ったのである。「落ち着かなければ。あの試験を突破するつもりだよ、ラーラ。見ていておくれ」それから私たちは笑って、彼がお茶を飲みに出て行く時に私は彼を抱き締めた。終わりよければすべてよしよ、と私は彼に言った。

バーティーの伝記作者はこの時期における彼の「確立しつつあった頑固さ」について書いている。またフィンチはそれまでとは違うバーティーが幼年時代という準備期間を経て現われてきたことに気づいた。彼は算数の基礎を理解することに努力し、代数の［x］の意味も覚え、初等幾何学のソクラテスの三角形もどうにか心に描くことができた。

外の世界ではほとんど過ごしたこともなく、またその知識も経験も持たず、また見知らぬ人に正しく話しかけることもほとんどできない、未発達の自信と自己信頼の跡が見えるようなこの青白い顔をした少年は、一九〇八年十一月五日の朝、英国海軍の審査委員会に出かけるため身仕度をした。彼の靴に最後の一磨きをし

て、幅の広い衿を真っすぐにし、愛情のこもった笑顔できれいなハンカチを渡したのはフィンチであった。「これは鼻をかむためのもので、泣きじゃくる時に使うものではありません。部屋に入る前にそんなことじゃだめです、バーティー様。提督はすぐにおわかりになるでしょう」

バーティーは顔を強ばらせて笑った。「最善を尽くすよ、フィンチ」

「勿論ですとも。ミュージック・ホールの歌のように、『オールド・ケント通りであいつらをやっつけろ』です」そしてフィンチはそれを信じた、というのはこの少年の体の内に燃えている力強さを誰よりも知っていたからである。

その朝十一時五分前にバーティーはホワイト・ホールにある、提督館の二階の事務室の隣の部屋で待っていた。空気中には強い靴磨きの匂いがして、激しい海戦の絵が樫の羽め板細工の壁で輝いていた。大きな柱時計が十一時を打つと、制服を着た海軍大尉が名乗ってから、頭を下げて、「こちらへいらしてくれませんか」と言った。

長い半円形の机の向こうで、茶色の皮の椅子に座って、それぞれがメモ用紙とコップ一杯の水を前にしていた。英国潜水艦の大佐、デヴォンポート海軍基地の旗艦の艦長、大規模なパブリック・スクールの校長、ウェッジウッド＝ベンと呼ばれる国会議員、オヘイガン卿、そして中心には威容な体躯の持ち主、ウィルモット・フォークス提督が位置していた。しかし提督はバーティーに話しかけた時、微笑んでいた。「お早ようございます、殿下。前にある椅子に腰掛けて下さいませんか。それから少しお話しをいたしましょう」

「あ、あ、ありがとう、て、て、提督」

審査委員会のメンバーは吃りについて事前に聞かされていたが、彼らの誰もこの最初の数分におけるようなひどいものとは思っていなかった。「彼はほとんど口を聞くことができなくて、どうやってこの少年が命令を下せるのであろうか、と思ったのを憶えている。緊急の事態の場合はどうする？　いや、いや、これはとても無理だ」とオヘイガン卿は回想する。「しかしフォークスは彼に寛大で、助けたりはしないが、親切で、質疑が実際的であった。我々みんなで一つか二つ質問をはさんでいくうちに、吃りが治まってきて、十分ぐらいたった時には我々は正常な会話をしていた。そして大変な情熱をもって、彼が今取り組んでいるインヴィンシブル号の模型のことを話してくれた。私は彼が大いに気に入ってね。そうは見えないのだが、彼がファイトのある若者とわかったね」

バーティーが退出した後、反対する意見はまったくなかった。「素晴らしい少年だ」「彼が呼び売り行商人の息子であったなら、彼を合格させることに何のためらいもなかったであろう」

立派な努力をしたが、まだ道は半ばであった。十二月の早いう

ちに筆記試験があり、バーティーは同じように不安な面持ちで迎えようとしていた。しかし同じように素晴らしい結果となった。フランス語口頭試験：百点、地理：六十一点、英語：八十二点、数学：七十二点、「本当に立派な成績だ。平均以下になったらしい幾何学を除いてね」

ラーラが日記に記している。「こうしてサイは投げられ、可愛いバーティーは一月にオズボーン兵学校に行くことになった。彼は現実の世界に投げ出されるにはあまりに若く、ひ弱に見えた。しかしおかしいことに、バーティーが彼の困難やハンディキャップを乗り越えることに、私はデヴィッドの時よりも大きな確信を感じたのである」

［伝記作者が伝えているが］十二才の終わりにアルバート公は彼の人生の第二段階を完了した。第一の幼年期は「ラーラ」・ビルによって、第二の家庭での学業期はフィンチとハンスル氏によって支配されていた。それは閉ざされた生活であった。彼は決して「自分自身の意のまま」にならなかった。王室の決まった旅行以外には世の中と決して関わらず、同い年の少年たちとも交わらなかった・・・。今や彼は心優しく、何の準備もないまま、競争社会という厳しい世界へ突き落とされようとしていた。そこでは成功の基準が少しどころか大いに肉体的剛勇さで決定づけられ、彼が皇太子の子供であるという事実は強味でも護ってくれるものでもなかったのである。

注

（1）おじい様・・・まもなくエドワード七世になる皇太子。

（2）ディッキー・・・マウントバッテン・オブ・バーマ伯爵となったが、彼は一九四七年における彼の甥フィリップと、ジョージとメイの初孫エリザベス王女（現在のエリザベス二世女王）との結婚を積極的に推し進めたのであった。

（3）ミダー・・・二人の王子は本来は彼を「ミスター」と呼ぶべきであったのだが、バーティーがこれを「ミダー」と間違って発音したので、先生には迷惑なことだが、そのままになってしまったのである。

（4）メイ・ヨーク・・・彼女は皇太子妃であったが、この非公式の名前は、彼女が王妃になるまで区別をはっきりさせるために用いる。

（5）五フィート三インチ・・・彼は結局のところ五フィート七インチになった。